Ⅲ　実態調査委員会報告

令和３年度実施　学力実態調査の集計と考察〈数と計算・データの活用〉

研　究　部　長　　田中　淳志
実態調査委員長　　熊倉　　勝
同　　副委員長　　日下　勝豊

１　令和３年度学力実態調査の実施方針

(1) 学習指導要領に基づき，過去と比較ができかつ次年度以降の結果にも活用できるようにする。
(2) 学力の評価の観点が明確になるようにする。
(3) 「数と計算・データの活用」について基礎的な力とともに，数学的な考え方の評価を工夫する。
(4) 結果の考察にあたっては，誤答例を挙げて指導の手だてを考え，活用できるようにする。

２　調査のねらい

(1)　調査内容

各領域の実態，各学年の大切な内容について継続的な調査を行うため，調査問題を吟味し，各領域で主に重点と思われる事柄について調査することとした。

(2)　各学年の「数と計算」「データの活用」領域の問題のねらい

学年	「数と計算」領域	「データの活用」領域
1	・1位数＋１位数＝１または２位数や，１または２位数－1位数＝１位数の計算ができる。 ・減法の立式が正しくできる。 ・数の規則性に着目して，正しく数系列を構成することができる。 ・カードの並び方の規則性に着目して，正しい式を考えることができる。 ・順序数・集合数の理解ができ，図に表現することができる。図から立式し，解決できる。 ・差が同じになる式をつくることができる。 ・式を具体的な場面に結び付けることができる。	・ものの個数を比べるときに，大きさや種類をそろえて表すことができる。
2	・２位数＋２位数，３位数－２位数の筆算ができる。 ・２位数－２位数のくり下がりのある筆算の仕組みを考えながら計算することができる。 ・乗法九九ができる。 ・乗数，被乗数の関係を考えて図に表したり，立式したりすることができる。 ・乗法を用い，工夫して数量を求めることができる。 ・加法と減法を理解し，図や式を用いて解決できる。	・観点を整理して表に表すことができる。 ・グラフから必要な事象を読み取ることができる。
3	・２位数×２位数，九九１回適用の除法，小数－整数，同分母分数の加法の計算ができる。 ・0.1，１/７を単位とした数の構成に気付くことができる。 ・整数を，ある数のいくつ分とみることができる。 ・乗法，除法が用いられる場面が分かる。 ・□を使った式に表すことができる。 ・２つの量を比べる時，何を基にして考えればよいのか判断できる。	・目的に合った棒グラフを選ぶことができる。
4	・小数÷整数，小数＋小数，四則混合の計算，帯分数－真分数の計算ができる。 ・小数や整数をある数のいくつ分とみることができる。 ・小数倍の場面について，数量の関係をとらえて演算決定し，何倍，いくつにあたるかを求めることができる。 ・帯分数と仮分数，同分子の分数，分数と小数との大小関係を比較することができる。 ・乗法，除法が用いられる場面が分かる。	・折れ線グラフで表すのに適した事象を選ぶことができる。 ・棒グラフと折れ線グラフの複合グラフを読み取ることができる。
5	・小数×小数，小数÷小数，異分母分数の加法・減法の計算ができる。 ・小数の乗法・除法が用いられる場面について，正しく立式ができる。 ・除法の性質を活用して，問題を解決できる。 ・最小公倍数を用いて，問題を解決できる。 ・分数や小数，除法の式で表された量の中から，同じ大きさの量を見付けることができる。	・平均を正しく求めることができる。 ・平均を用いて，全体量を求めることができる。 ・帯グラフから割合や絶対数などの情報をとらえることができる。
6	・異分母分数の乗法・除法の計算ができる。 ・分数の乗法・除法が用いられる場面について正しく立式することができる。 ・分数の除法は，わる数の逆数をかければよいことの根拠を説明することができる。 ・文字を使って数量の大きさを式に表すことができる。	・順列について，落ちや重なりのないように調べることができる。 ・データをもとに考察することができる。

(3)　評価基準の設定について

問題の形式を工夫し，１問１答形式の問題ばかりではなく，複数解答の問題を作成した。評価基準をＡ（正答），Ｂ（一部正答），Ｃ（誤答）等の段階に設定し，多くの解答に着目し，児童の考え方や間違えやすい事柄に対して考察がより詳しいものになるようにした。

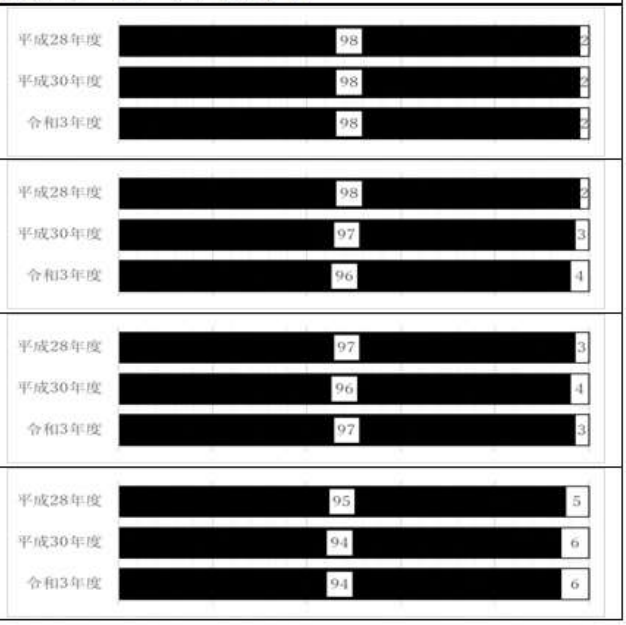
３　各学年の集計結果と考察

令和３年度　実態調査　第１学年の結果と考察　　調査人数　43,903 人

1 つぎの　けいさんを　しましょう。

（1）３＋６＝ **9**　　（2）　９＋５＝ **14**　　（3）９－４＝ **5**　　（4）１３－８＝ **5**

問題		評価規準及び割合（%）　※割合は、アルファベット順とする。		
1	（1）	A	C	
		9	左記以外の誤答・無答	
	（2）	A	C	
		14	左記以外の誤答・無答	
	（3）	A	C	
		5	左記以外の誤答・無答	
	（4）	A	C	
		5	左記以外の誤答・無答	

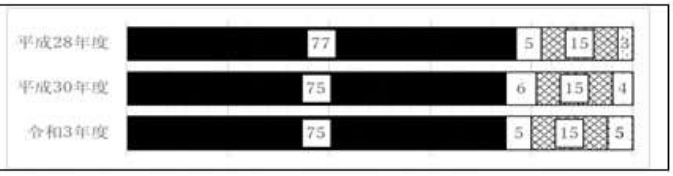


1　（１位数）＋（１位数）の加法，及び（１・２位数）―（１位数）の減法の問題である。２位数が和や被減数に関わる（２）（４）が２～３ポイント正答率が下がるが，どの問題も高い正答率である。この傾向は数年来続いており，第１学年からの計算練習の習熟の成果であると言ってよい。基本的な計算力は今後の基礎となるため，第１学年の段階で確実にこれに準じた計算は習熟させたい。また，「まとまり」をキーワードに加法減法ともにおさえ，まとまりの考えの素地を養いたい。具体的には５や 10 の合成・分解の考え方を計算の説明に活用し，具体物，絵や図を使って児童が計算を視覚的に捉えることができるようにしたい。

2 すずめが　６わ，からすが　９わ　います。どちらが　なんわ　おおいですか。
しきを　かきましょう。

しき **9－6**

	A	C１	C２	C３
2	９－６	６－９	たし算の式	左記以外の誤答・無答

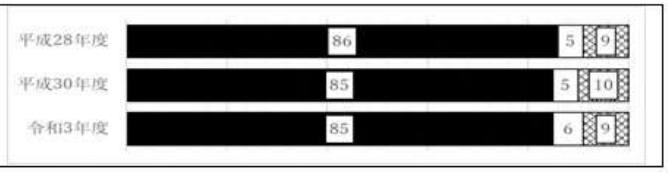


2　求差の減法を正しく立式できるかをみる問題である。正答率自体は前回と比較しても横ばいであると言える。問題1で高い正答率を見せていたが，このような文章題になると立式ができない児童が 25%程度いることになる。理由の一つとして，文章の中の「どちらが　なんわ　おおい」という記述から加法の立式をしていると思われる。問題1の分析で具体物，絵や図を用いて理解することを述べたが，このような問題場面を確実に理解できるように習熟させる必要がある。

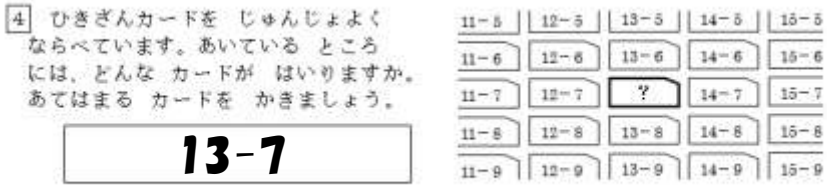
1. すすすすすすす　　「すずめが　６わ　います。」
2. かかかかかかかかか　「からすが　９わ　います。」
3. すすすすすす
   ｜｜｜｜｜｜
   かかかかかか かかか(←おおい３わ)　「どちらが　なんわ　おおいですか」

のように順序立てて操作を例示するなど，確実に計算や問題場面の仕組みを理解できるようにしたい。

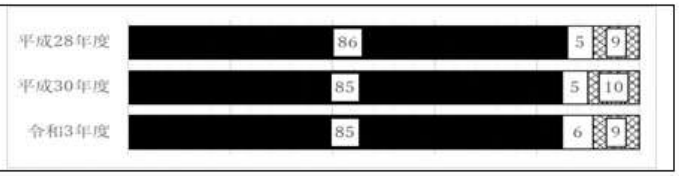
	A	B	C
3	2,42,52 完答	42,52 のみ	左記以外の誤答・無答



3　数の規則性に着目して，正しく数系列を構成することができるかをみる問題である。３つの□のうち，右２つは正答で，左端だけあてはまる数を書けなかった誤答は，１ポイント増加したものの６％と前回調査とほぼ変わらなかったが，一定数いることが分かった。数系列の指導では，小さい数から大きい数への変わり方をみていくと「10 ずつ増える」や「一の位の数は変わらないが，十の位の数が１ずつ増えている」などのきまりに気付くことができるようにしたい。また，小さい数から大きい数への変わり方をみるだけでなく，大きい数から小さい数への変わり方をみる見方も養いたい。例えば，「２とびの数」「５とびの数」等の指導の際には，数と数の間がいくつ違うかを書き込むなかで，累減する（数が減る）方向への数の見方を指導することも大切である。また，10 とびなど大きな数になると分からなくなってしまう児童には，□と 12 の間にある数を考えさせ，「□から５とびになる数はいくつだろう。」と問うなど，段階的に指導していくことが有効ではないかと考えられる。



	A	B	C
3	2,42,52 完答	42,52 のみ	左記以外の誤答・無答

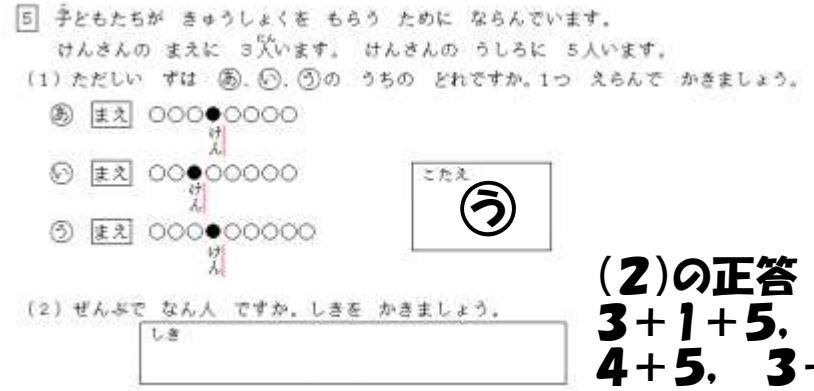


4　順序よく並べられた計算カードの欠けている部分にどのような式が入るかを考える問題である。平成 30 年度の正答率から 1.2 ポイント増加しているが，被減数または減数にのみ着目している答えも見受けられる。計算カードの並び方のきまりを見付ける活動は，ひき算の学習の単元末に設けられており，ここで初めてひき算の被減数や減数の変化に着目する児童も多いだろう。

欠けたカードの式を見付けるためには，カードを縦にみて減数が１ずつ増減し被減数は変わらないことや，横に見ると減数は変わらず被減数が１ずつ増減することに気付かせるなど，式のどの部分が変化しているのかを考えさせる。このように，変わり方に着目するという数学的な見方・考え方を養うためにも，大切な数学的活動であると考える。また，数についての感覚を豊かにするために，以下の指導を取り入れたい。

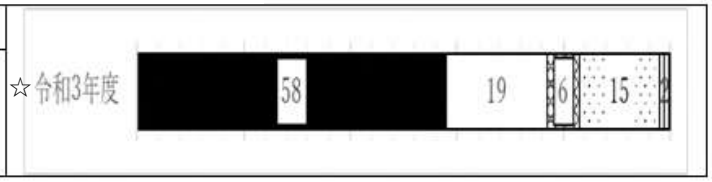
① 答えが「６」という１つの数を「13−７」や「14−８」のように２つの数の差として捉えさせる活動（どんな式があるか考えさせる）

② 同じ答えになるカードが斜めに並んでいるのに着目させ，「答えが同じとき，被減数が１減ると減数も１減る」という減法のきまりに着目させる活動



(2)の正答
3+1+5, 3+5+1,
4+5, 3+6, 1+8 など

	A	B1	B2	C1	C2
5(1)(2)	(1)(2) 正答	(1)のみ 正答	(2)のみ 正答	2つとも誤答	無答

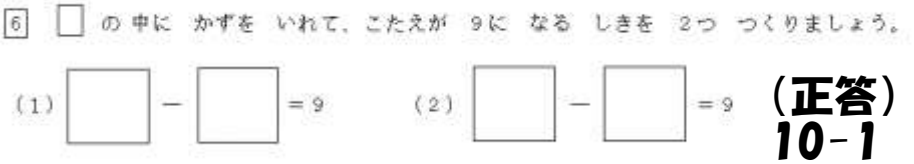


【 年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題 】

5 順序数・集合数が図に表されたものを理解することができ，問題文や図から立式し，解決できるかをみる問題である。

図のみ正答した児童が 19.2%いた一方で，式のみ正答した児童は 5.7%と低い。問題文から図にすることはできるが，立式で間違えてしまう児童が多いという実態がある。また，問題文から順序数･集合数の場面が正しくイメージできなければ立式し課題を解決することが難しいことが分かる。

問題文を正しく図に表す指導を行うことはもちろんのこと，図と式を結び付ける指導を丁寧に行いたい。問題の場面を，半具体物を使いながら図に表し，式と結び付けて計算する過程を指導に取り入れたい。（2）は３＋５＋１や４＋５，３＋６などどれも正答としているが，３＋５＋１であれば，「まず自分の前に３人，後ろに５人，そして自分の１を足しました。」や，４＋５であれば，「この４は自分を入れて前に４人，後ろに５人いるという意味です。」など式の意味を，図の部分を指し示したり，自分の言葉で説明させたりすることで，問題の構造を理解するとともに，図・式・言葉を結び付けて考える力の素地として指導したい。



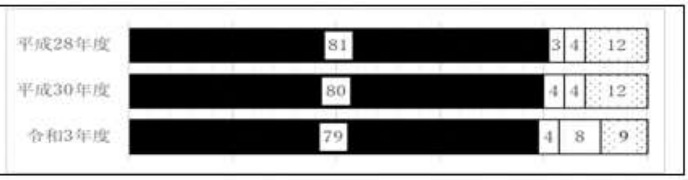
(正答)
10-1 11-2 12-3 ・・・
19-10 などから２種

	A	B	C
6(1)(2)	2つとも正答	1つ正答	左記以外の誤答・無答

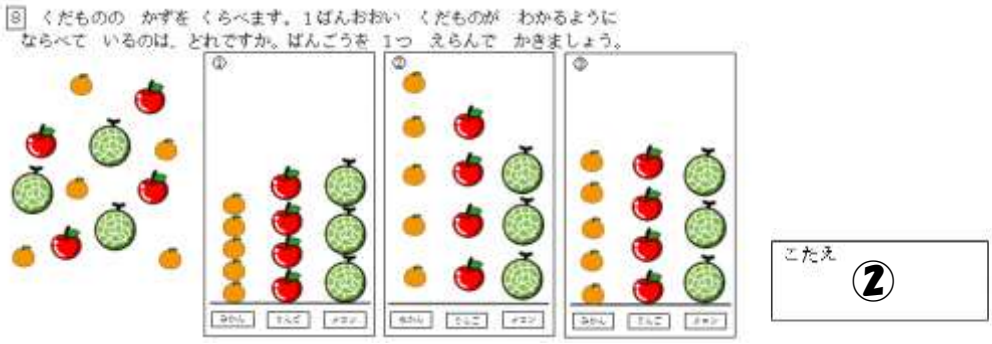
6 □−□＝９となる式を２つ考える問題である。正答率は平成 30 年度の 88%からほぼ変わっていない。式があって答えを求める問題1に比べ，決まっている答えに合わせて式を作る問題になると正答率が下がる傾向があることがうかがえる。また，１つだけ正答している児童は 6.9%という結果から，問題の意味を十分に理解できていない可能性もある。

具体的な指導例としては，問題4と同様に，式から同じ答えになるものを探すだけでなく，同じ答えで違う式になるものを探す活動を取り入れる。また，神経衰弱のような計算カードを用いた遊びを取り入れて，答えが同じになる式を見付ける活動などを取り入れていきたい。

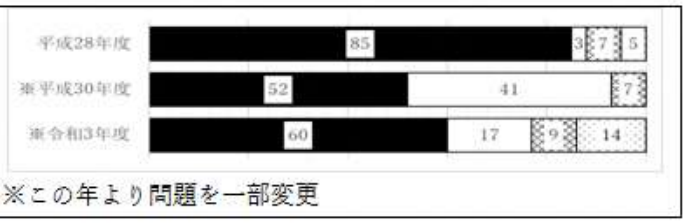
7	A	C1	C2	C3
	②	①	③	左記以外の誤答・無答



7　式を読み，具体的な問題場面と結び付けて考えることができるかをみる問題である。正答率は79%と例年とほぼ変わっていない。一方で③の誤答を選ぶ児童は８％と前回の４％から大きな変化が見られた。③を選んだ児童は，問題文の数値のみを頼りに立式していると考えられる。また，例年と変わらないものの①の誤答を選んだ児童は４％見られた。①を選んだ児童は，絵だけを頼りに加法と捉え誤答したと考えられる。「あわせて」「ふえると」「ちがいは」「のこりは」などのキーワードで立式する方法は，一定の効果がある。しかし，キーワードを押さえるだけの指導ではなく，具体物の操作を通して，場面の理解を深め，立式に結び付ける指導も合わせて行うことが大切である。また，問題作りの学習活動を丁寧に行い，児童が作った問題が本当にたし算（ひき算）になるのかをみんなで確かめる活動を取り入れることで，理解が深まると考える。



8	A	C1	C2	C3
	②	①	③	左記以外の誤答・無答



8　ものの個数を比べる時に，大きさや種類をそろえて表すことができるかをみる問題である。平成29 年度の学習指導要領の改訂に合わせ，今年度も平成 30 年度に引き続き問題の一部を変更した。前回は，大きさに捉われず個数に着目し，下端をそろえて高さで個数を比べる図が選択できるかをみるために選択肢を２つに絞った。正答率は 52%であり，半数近くの児童が正しく選ぶことができなかった。そのため，今年度は選択肢を３つに戻して実施したところ，正答率は 60%と８ポイント上がり，前回間違った図を選んだ児童は 41%から 17%となり，24 ポイント減少した。しかし，大きさや個数に関わらず，高さのみで比べられると考えて①を選んでしまう児童もまだ少なくはないことが分かる。

物の個数を数えたり比べたりするときに，種類ごとに分類整理し，大きさに捉われずに均等に配置したり，大きさを揃えるたりすることで，一目で分かるよさを児童が十分に感得しているとは言い難い。指導の際には，大きさの違う物を対象にしたり，個数や大きさなどの観点に着目して比べたりする活動を十分に取り入れることが大切である。さらに，児童が３枚の図を見比べて，どのような点がおかしいか，どのようにしたらよいかを考える時間を設けることで，児童は自然と調べる物の大きさが異なっても，一つ一つの大きさを揃えたり，並べる際はそれぞれを均等に配置したりすることが大切であると気付くと考える。児童同士の話し合いの活動や，実際に大きさの異なる比較物を用意して数を比べさせるなどの活動も十分に取り入れたい。

令和３年度　実態調査　第２学年の結果と考察　　調査人数　48,219 人

1　計算を　ひっ算で　しましょう。

（1）　６６＋７８　**144**

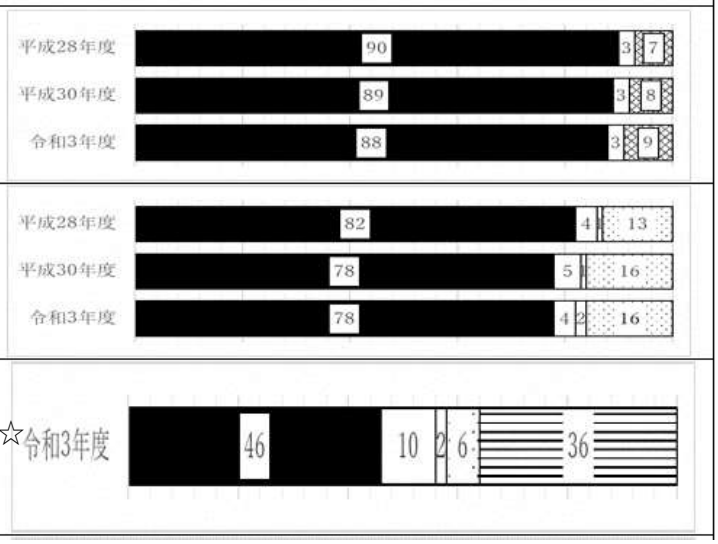
（2）　１０１－６７　**34**

2　□に　あてはまる　数を　かきましょう。

```
  6  イ
－ ア  9
―――――
  2  3
```

ア **3**　　イ **4**

問題		評価基準及び割合（%）　※割合は、アルファベット順とする。				
1	（1）	A	C1	C2		
		正答	66 ＋78 ―― 144	左記以外の誤答・無答		
	（2）	A	C1	C2	C3	
		正答	101 －67 ―― 44	101 －67 ―― 46	左記以外の誤答・無答	
2		A	C1	C2	C3	C4
		完答	ア4 イ6	ア3 イ6	ア4 イ2	左記以外の誤答・無答

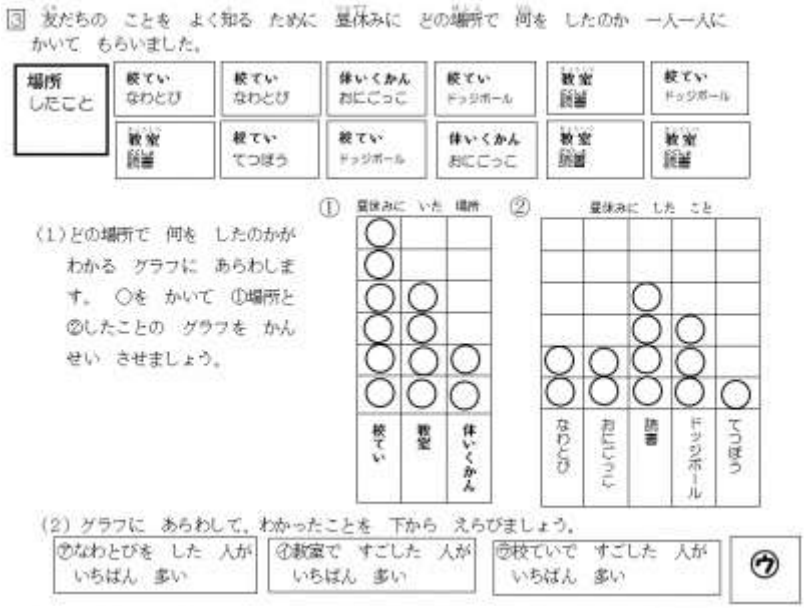


【 年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題 】

1　２位数の加法・減法の計算ができるかをみる問題である。加法も減法も前回と正答率は横ばいである。１が 10 個集まったら繰り上がり，10 が 10 個集まると繰り上がる十進位取り記数法の仕組みを多くの児童が理解できていることが分かる。しかしながら特に減法においては，計算の意味理解が不十分であり，それによる誤答や無答が見られた。この計算の理解は，ブロック操作や図を用いて，位の上がり下がりを視覚的に捉えさせることが大切である。また，式や言葉とも関連付けて計算の仕方を説明したり，読み取ったりする活動により，計算の意味理解が深まり，筆算を用いて数を形式的に処理できるようになると考えられる。また途中の経過を筆算上に表記すること，たしかめ算を用いて答えが正しいものになっているかを習慣付けることで，形式的な処理だけでなく，児童の数感覚を豊かにしたり，筋道立てて考える力を高めたりしていきたい。

2　２位数―２位数の繰り下がりのある筆算の仕組みを捉えているかをみる問題である。正答率は 46%であった。今回から新たに取り入れた問題で，各教科書では，発展的内容として取り扱われている。児童があまり慣れない問題であったこと，また形式的な筆算とは違い，答えを導く過程を筋道立てて考えていく必要があるため，誤答が多かったと考えられる。十の位を４と解答している児童が 16%以上いる。このことから，児童は筆算を位のみで判断し，繰り下がりのある筆算の仕組みについての理解が不十分であることが分かる。

　繰り上がりのあるたし算や，繰り下がりのあるひき算の筆算の指導をする際には，具体的な場面を図と式で表し，数量の関係を捉えさせたり，加法と減法の相互関係を捉えさせたりすることが大切である。また，答えを導く過程を筋道立てて考えさせるには，意図的に誤答を取り上げ，「どこに誤りがあるのか」「正しくはどのように計算するのか」を具体物や図などを用いて説明する活動を取り入れることも有効であると考えられる。「９をひける数は９しかないので，きっと繰り下がりがあります。」「十の位は，一の位に１繰り下げたので，減っています。」など児童が自分の言葉で根拠をもって説明する活動を取り入れ，計算の仕組みを理解させたい。そして，このような取り組みを繰り返しながら，筋道立てて答えを導く児童を育んでいきたい。



4 かけ算をしましょう。

(1) 8×7＝ **56**

(2) 4×7＝ **28**

(3) 7×6＝ **42**

		A1	B1	B2	C	
3	(1) ①②	①② 完答	①のみ 正答	②のみ 正答	左記以外の誤答・無答	☆令和3年度 69 / 11 / 8 / 12
	(2)	A 正答			C 左記以外の誤答・無答	☆令和3年度 86 / 14
4	(1)	A 正答			C 左記以外の誤答・無答	平成28年度 96 / 4 平成30年度 93 / 7 令和3年度 93 / 7
	(2)	A 正答			C 左記以外の誤答・無答	平成28年度 95 / 5 平成30年度 92 / 8 令和3年度 93 / 7
	(3)	A 正答			C 左記以外の誤答・無答	平成28年度 94 / 6 平成30年度 91 / 9 令和3年度 91 / 9

【 年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題 】

3 身の回りにある数量を分類整理して簡単なグラフに表すことや表したグラフからデータの特徴を読み取ることができるかをみる問題である。この問題は令和３年度の実態調査から新たに設定した。

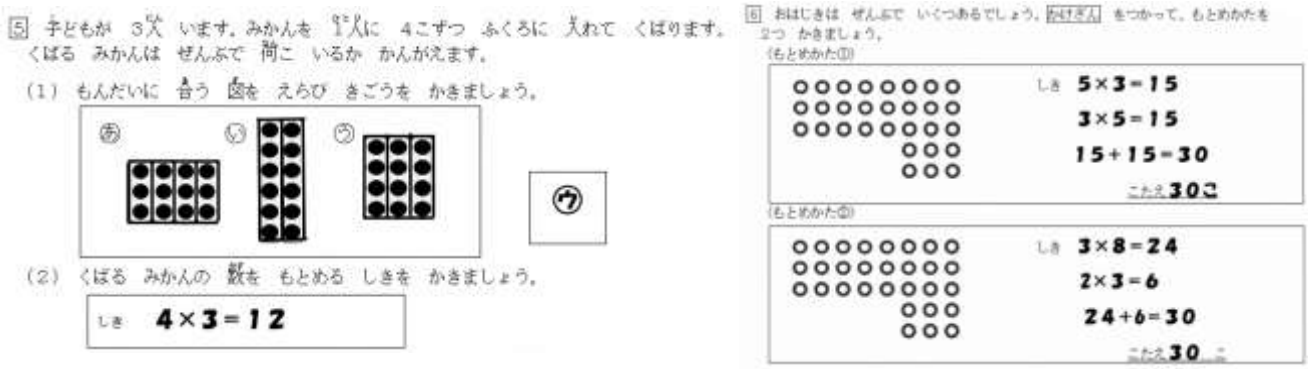
問題（1）では，アンケートの回答用紙 12 枚を「①昼休みにいた場所」と「②昼休みにしたこと」の観点で分けて簡単なグラフに表す。どちらとも正答した児童の割合は 69.2%，①のみ正答した児童の割合が 10.5%，②のみ正答した児童の割合が 8.2%，どちらとも正答しなかった児童の割合は 12.1%だった。

単独での正答の割合が①よりも②の方がやや低いことから，児童にとって分類項目が増えるほど，整理する際の思考労力が必要となり，作業精度が落ちてしまうことが考えられる。資料の合計を基に，落ちや重なりがないかどうかをみることは第３学年からの内容であるが，資料に印を付けて数えながらグラフに表していく「一対一対応」の見方を働かせて落ちや重なりがないようにするなど，

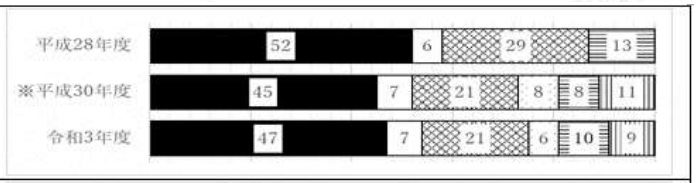
正確に資料を整理する指導を大切にしたい。

問題（2）では，①と②のグラフから読み取れる事柄を判断する。正答した児童の割合は 86.0％，正答しなかった児童の割合は 14.0％だった。このことから，同じデータを異なる観点で整理した二つのグラフから集団の特徴を読み取ることができていると言える。問題の発見から始まる一連の統計的探求プロセスにおいて，第２学年では，観点を変えて整理する統計的な見方・考え方を育むことが大切である。その際，課題に応じて児童が主体的に観点を変えて整理していくようにしたい。日常の生活や学習も視野に入れた教科等横断的なカリキュラム・マネジメントも指導の工夫として考えられる。

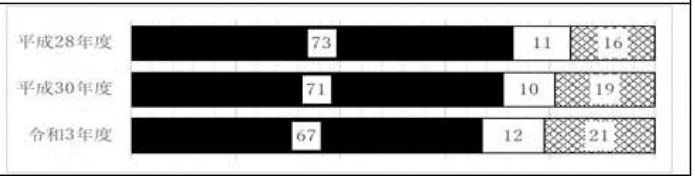
4　乗法九九ができるかをみる問題である。例年同様，正答率は 90％を超えている。東京都の先生方が，日々の授業の中で，丁寧に様々な指導を重ねていることが分かる。さらに子供の学力を高めていくために，３年生や４年生の学習を踏まえた指導を積み重ねていきたい。具体的には，乗法九九適用外のかけ算においても，自ら答えを出したり，九九表を構成したり観察したりして乗法の性質や決まりを見付けるなどの活動に取り組ませていきたい。



5 (1)(2)	A1	B1	C1	C2	C3	D
	(1)(2) 完答	(2)のみ 正答	(1)のみ正答 (2)3×4	(1)のみ正答 (2)3×4 以外の式	(1)誤答 (2)3×4	左記以外の 誤答・無答



6	A	B	C
	完答	1問正解	左記以外の 誤答・無答



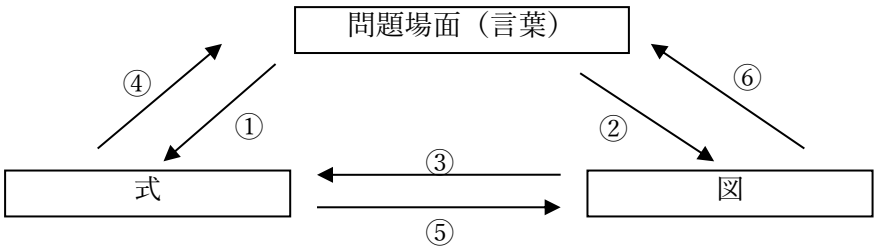
【 年度の横の記号は，※：この年度より問題の一部を変更して実施している問題 】

5　問題場面の数量関係に着目し，乗法の意味に基づいて被乗数と乗数を捉えてアレイ図に表し，立式することができるかをみる問題である。

乗法は，一つ分の大きさ（被乗数）が決まっているときに，その幾つ分に当たる大きさ（乗数）を求める場合に用いられる。(1)では，長方形による囲みが一つ分のまとまりを表し，またその中の●の数がその大きさを表している。そして，その長方形の数が幾つ分を表している。一方で問題文では，一文目に「子どもが３人います。」二文目に「みかんを１人に４こずつふくろに入れてくばります。」とある。そのため，一つ分の大きさは４，その幾つ分に当たる大きさは３となる。よって，(1)の正答は㋒となる。(1)を正答できた児童は，(1)のみ正答も含めると約 74％いる。この実態から，大方の児童が問題文の言葉から乗法の関係を捉え，乗法の意味に基づいて図を読み取っていると考察することができる。

しかし，(2)の立式の誤答に着目すると，(1)が正答であったとしても３×４と立式したり，それ以外の式で表したりする児童が約 27％もいる。ここから，(一つ分の大きさ）×（幾つ分）＝（幾つ分かに当たる大きさ）という乗法の式の意味理解に基づいて式化できていない児童の実態が見える。一方で，(2)のみ正答しているのが約７％，３×４という誤答も含めて(1)と(2)ともに誤答しているのが約 19％いることも踏まえると，言葉と図と式の三位一体で乗法の意味を十分に理解しているとは言い難い実態が見えてくる。

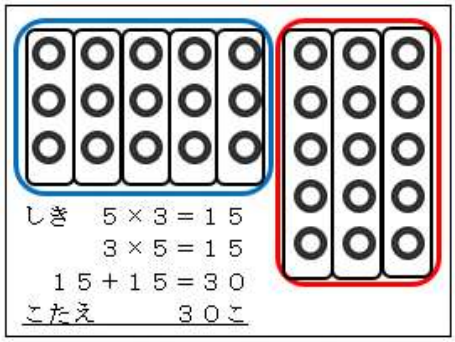
そこで，乗法が用いられる場面を式に表す（次頁の①），乗法が用いられる場面を図に表す（次頁の②），乗法の関係を表す図を式に表す（次頁の③）だけでなく，乗法の式を場面として言葉に表す（次頁の④），乗法の式を図に表す（次頁の⑤），乗法の関係を表す図を場面として言葉に表す（次頁の⑥）と，言葉と図と式を関連付ける指導の工夫を図り，乗法の意味理解の定着を確実にするとともに深めていくことが重要である。

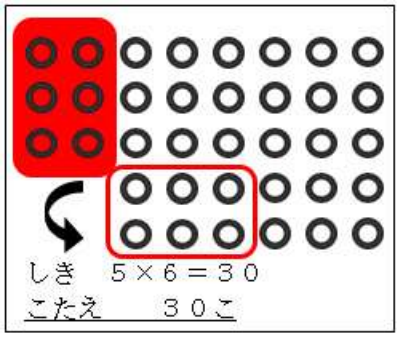


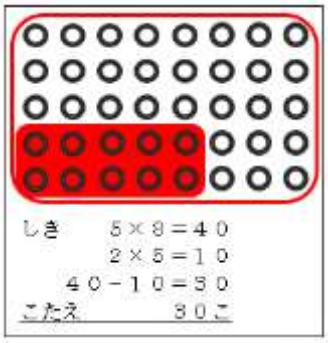
6　Ｌ字型に並んだものの数を，乗法を用いて工夫して求めることができるかをみる問題である。正答率は 67％であり，前回調査からは４ポイント減少している。一通りの式が立てられた児童は 12％おり，完答と合わせると，79％の児童は何らかの形で乗法の考えを用いて問題を解決できたと言える。一方で，誤答・無答の児童が 21％いる。この問題場面では，同じ数のまとまりに着目して，乗法の式に表すことに難しさを感じていることが考えられる。

そこで指導に当たっては，順序立てて考えるという見通しをもたせてから同じ数のまとまりに着目させ，乗法で表せる部分を見付けさせたい。前時までのアレイ図での九九の構成を想起させ，まずは縦や横の１列の数に着目して考えさせるようにする。その後，他の求め方がないかを再考することで，より分かりやすくて簡単な方法に気付かせたい。この意識は，第４学年で学習する複合図形の求積でも生かされると考える。ない部分を埋めて乗法で表す見方は，日常や今後の学習においても活用できる考え方であるため，なるべく児童から引き出したい。そこで，箱に敷き詰められたものの挿絵を提示するなどして全て埋まっている状態を想起させ，そこからない部分をひくと求められることに気付かせていきたい。

また，ものの個数を数える際は，数のまとまりに着目して見取る感覚を豊かにする数学的活動を日常的に取り入れることも大切にしたい。式だけでなく，半具体物・アレイ図・ドット図・言葉による多様な表現をさせることも重要であると考える。

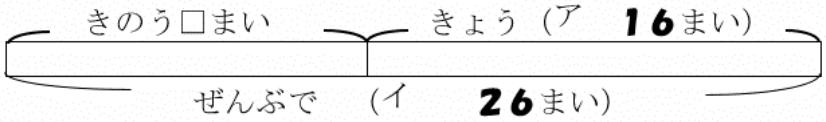






7　きのう　カードを　何まいか　作りました。きょう　カードを　１６まい作ったので、ぜんぶで　２６まいに　なりました。きのう　作った　カードは、何まいですか。

（１）（　　）に　あてはまる　数を　かきましょう。



（２）きのう　作った　カードの　数を　もとめる　しきを　かきましょう。

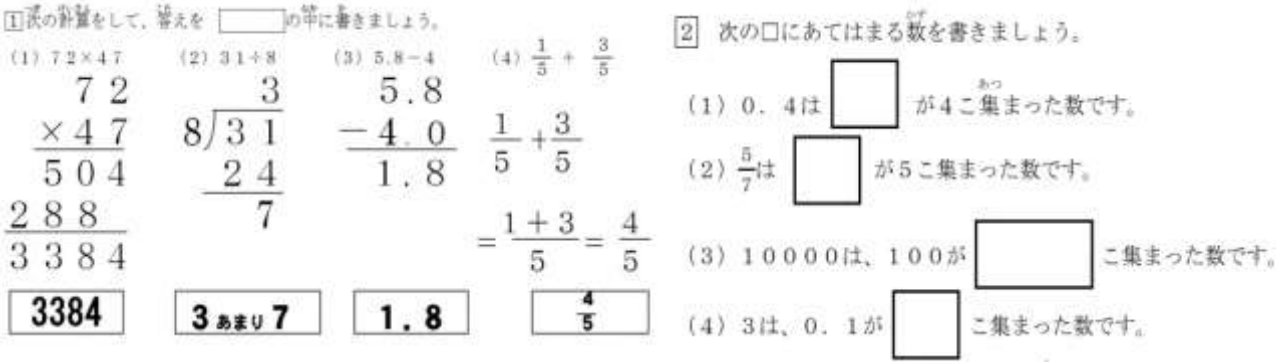
しき
26－16＝10

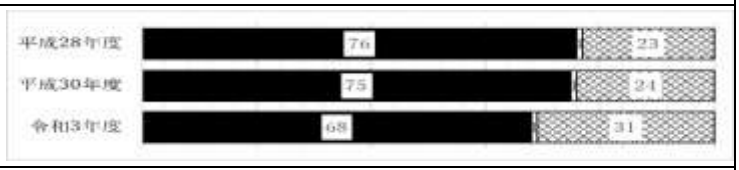
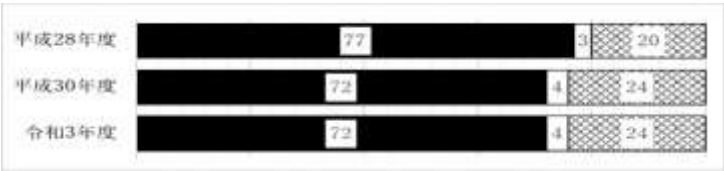
7　加法と減法を理解し，図や式を用いて解決できるかどうかをみる問題である。正答率は前回より３ポイント減り，誤答・無答が２ポイント増えた。（１）のみ正答が７％いることから，問題場面をテープ図に表すことができても，立式できていないことが分かる。

テープ図は，具体物やブロックなどの半具体物で表してきた数量を抽象化し，テープの長さに置きかえた図である。テープ図に表すことで，被加数・加数や被減数・減数，和や差の関係を視覚で捉えることができ，演算決定と解の見積もりに役に立つ。２年生で学んだテープ図は，その後３年生で線分図，そして比例関係を表す２本の数直線を組み合わせる学習へとつながっていく。このことから，２年生の時にテープ図を使って式を表す，式からテープ図を表すなどの活動を繰り返し行っていく必要がある。

また，指導をする際には，部分と全体の関係を意識し，図を活用して問題を解こうとする態度を育成することも重要である。一つ一つの指導に丁寧に取り組み，児童の苦手意識を少しでも改善させていきたい。

令和３年度　実態調査　第３学年の結果と考察　　調査人数　33,901 人



問題		評価基準及び割合(%)　※割合は，アルファベット順とする。			
1	(1)	A	C１	C２	
		正答	792	左記以外の誤答・無答	
	(2)	A	C１	C２	
		正答	４あまり１	左記以外の誤答・無答	
	(3)	A	C１	C２	
		正答	5.4	左記以外の誤答・無答	
	(4)	A	C１	C２	
		正答	$\frac{4}{10}$	左記以外の誤答・無答	

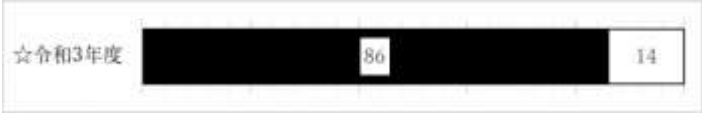
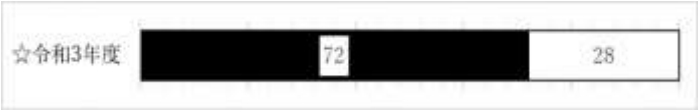
1　（１）は，２位数×２位数の計算ができるか，（２）は，九九１回適用のあまりのある除法の計算ができるか，（３）は，位をそろえて小数－整数の計算ができるか，（４）は，同分母分数の加法の計算ができるかをみる問題である。正答率は，（１）は 68%，（２）は 72%，（３）は 76%と，あまり高いとは言えない。どれも，計算技能の習熟を図ると共に，一つ一つの計算の意味を理解させることが重要である。

（１）では，筆算形式を組み立てていく際に，「０」の省略がない部分積が書かれた形式にふれさせ，部分積の大きさの意味を正しくとらえられるようにしていく必要がある。

（２）では，九九の知識を基にして答えの見当を付けることが大切になる。具体物の操作や，図や絵などでイメージ化を図ることや，除数と余りの関係に着目する視点をもたせていくことを大切にしていきたい。

（３）は，小数を「0.1 の何個分」とみることが不十分であることが考えられる。この見方を大切にし，小数の計算も整数と同じように計算できることを押さえていきたい。また，「４→4.0」のように表し，位に着目してそろえて計算する意味や必要性を理解させたい。

（4）の正答率は，92%だった。単位分数に着目することで整数と同じように計算できることを押さえていくことが大切である。単位分数に着目できるよう，図に表して視覚的にとらえることも大切にしていきたい。

2	（1）	A		C	
		正答		左記以外の誤答・無答	
	（2）	A		C	
		正答		左記以外の誤答・無答	
	（3）	A	C 1	C 2	
		正答	1000，10	左記以外の誤答・無答	
	（4）	A		C	

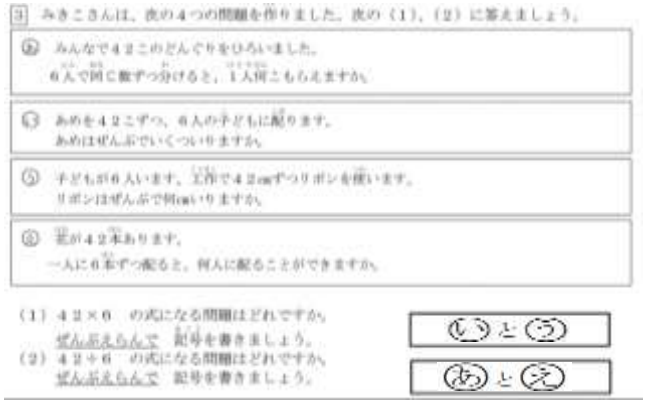
【年度の横の記号は，※：この年度より問題の一部を変更して実施している問題　☆：この年度より新設した問題】

2　（1）は 0.1 を単位とした数の構成に気付くことができるかをみる問題である。正答率は，86%であった。数直線を用い，基準量１は 0.1 の 10 こ分であることをしっかり捉えさせながら大きさを読んだり表現させたりしていくことが必要である。

（2）は，単位分数が何個分とした数の構成に気付くことができるかをみる問題である。正答率は，72%であった。分数も，整数や小数と同じように数直線で表すことができるか考えることで単位分数が身に付いていくと考えられる。

（3）は，整数をある数のいくつ分とみることができるかをみる問題である。正答率は，72%であった。数を相対的にみる力は，児童の実態に応じて，模擬貨幣を用い「一万円は千円札が 10 枚」という体験だけでなく，「百円玉で両替すると 100 個になる」「十円玉で両替するとどうなるか」などと考える活動をさせることで，10000 や 100 といった任意単位の量の関係が捉えやすくなり「整数をある数のいくつ分とみる見方」を身に付けていくことが必要である。

（4）は，整数を小数のいくつ分とみることができるかをみる問題である。正答率は，81%であった。数の相対的な見方を育てるためには，十進位取り記数法のきまりを十分に理解させた上で，それが小数にも適用できることを捉えさせることが大切である。そのために数直線に表された小数を読む活動を丁寧に行い，数の関係を視覚的にも捉えられるようにさせたい。その中で，３は 3.0 とみることができ，0.1 が 30 個あるという数の感覚も豊かにしていきたい。


3 みきこさんは、次の４つの問題を作りました。次の（1），（2）に答えましょう。

② みんなで４２このだんごをひろいました。
６人で同じ数ずつ分けると，１人何こもらえますか。

③ あめを４２こずつ，６人の子どもに配ります。
あめはぜんぶでいくついりますか。

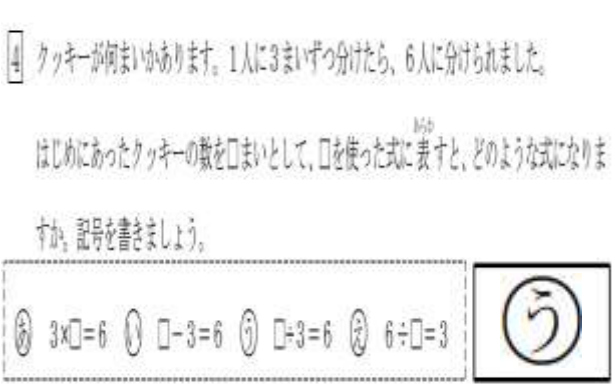
⑤ 子どもが６人います。工作で４２cmずつリボンを使います。
リボンはぜんぶで何cmいりますか。

⑥ 花が４２本あります。
一人に６本ずつ配ると，何人に配ることができますか。

（1）４２×６　の式になる問題はどれですか。
ぜんぶえらんで　記号を書きましょう。
（2）４２÷６　の式になる問題はどれですか。
ぜんぶえらんで　記号を書きましょう。

い と う

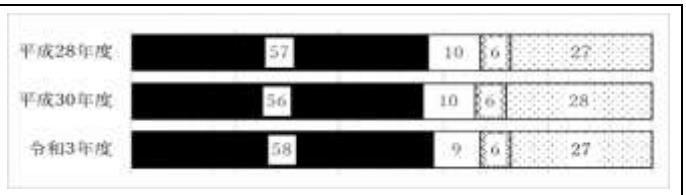
あ と え


4 クッキーが何まいかあります。1人に3まいずつ分けたら、6人に分けられました。

はじめにあったクッキーの数を□まいとして、□を使った式に表すと、どのような式になりますか。記号を書きましょう。

あ 3×□=6　い □−3=6　う □÷3=6　え 6÷□=3

う

3	（1）	A	B１	B２	C	
		完答	いのみ	うのみ	左記以外の誤答・無答	
	（2）	A	B１	B２	C	
		完答	あのみ	えのみ	左記以外の誤答・無答	
4		A	B１	B２	C	
		正答	あ	え	左記以外の誤答・無答	

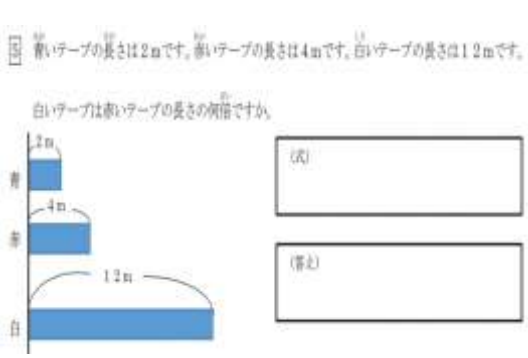
3　乗法・除法が用いられる場面が分かるかどうかをみる問題である。正答率は，（1）で 58%，（2）で 60%であった。乗法・除法のどちらの問題でも，「左記以外の誤答，無答」が 26%を超えた。乗法の式は「（１つ分の数）×（いくつ分）=（全部の数）」。除法の式は，等分除「（全部の数）÷（人数）=（１人分の数）」と包含除「（全部の数）÷（１人分の数）=（人数）」の２つがある。この理解を深めるために，おはじきなどの半具体物の操作や，図を用いて考える活動を繰り返し取り入れる必要がある。等分除・包含除については日常の場面に結び付けて考える活動を大切にし，わり算の意味について理解を深めさせたい。

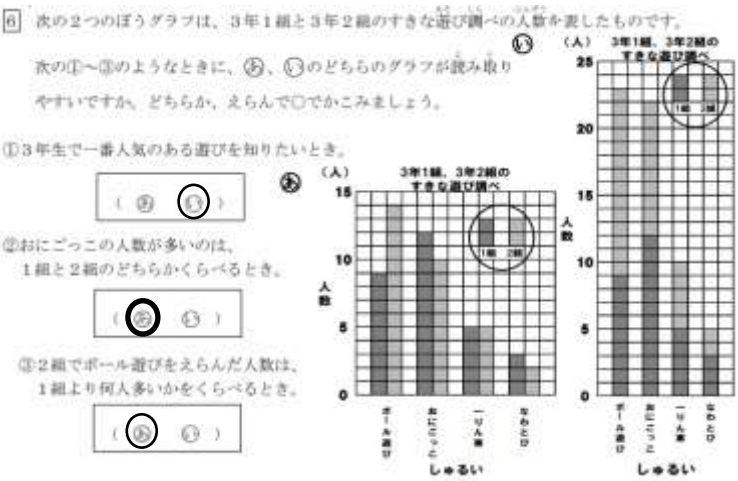
いくつもらえるかな？わくわく！

等分除（わくわく算）：みかんが 15 個あります。３人で同じ数ずつ分けると，１人分はいくつ？
包含除（どきどき算）：みかんが 15 個あります。３個ずつ分けていくと，何人に分けられる？

何人もらえる？自分はもらえる？どきどき！

4　文章から□を使った式を立式する問題である。誤答では，かけ算の式を選んだものが多かった。「３枚ずつ」という言葉だけに注目し，３の倍数になると考えたと予想される。「左記以外の誤答・無答」も 11%であり，問題場面を具体的に想像できなかったり，□を使った式に表すことに十分に慣れていなかったりしたことも考えられる。問題場面と図，式を関連付けながら式の意味を考えさせたい。



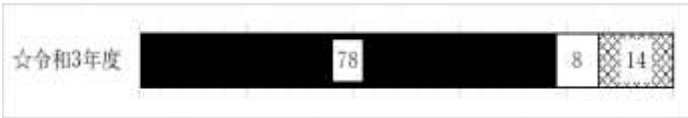


		A	B1	C1	C2	C3	C4
5		完答	4 × 3 ＝12 3倍	12×4 ＝４８	12÷2 ＝６	答え３ｍ単位なしも含む	左記以外の誤答・無答

		A	C1	C2
6	①	正答	あ	左記以外の誤答・無答

		A	C1	C2
6	②	正答	い	左記以外の誤答・無答

		A	C1	C2
6	③	正答	い	左記以外の誤答・無答



【年度の横の記号は，※：この年度より問題の一部を変更して実施している問題　☆：この年度より新設した問題】

5　２つの量を比べる時，何を基にして考えればよいのか判断できるかを見る問題である。比べる２本のテープ図を間違えてしまい，誤った数値で立式してしまう誤答が６%だった。前回の正答率から６ポイント下がったことから，３つのテープ図から２つの必要な情報を取り出し，何をもとにして考えたらよいか正しく理解できていない児童が多いことが分かる。図を基に考えるよさや意味を学習の中でもっと価値付けていきたい。

6　目的にあった適切な棒グラフを選ぶことができるかをみるために，令和３年度から設定された問題である。（１）は学年全体の人数に着目できるかをみる問題で，正答率は 75%，不適切なグラフを選んだ児童が 13%であった。一方，（２）（３）のクラスごとの人数に着目できるかをみる問題では，正答率が（２）が 81%，（３）が 78%，不適切なグラフを選んだ児童は（２）で７%，（３）で８%だった。

指導に当たっては，「学年全体でボール遊びや鬼ごっこは人気がある」「ボール遊びはクラスによって違いがある」などのように，どのグラフの，どの部分からそのように考えたのかを伝え合う活動を大切にし，目的に合わせて棒グラフの表現を工夫するよさについて気付かせたい。

令和３年度　実態調査　第４学年の結果と考察　　調査人数　36,696 人

1　次の計算をして，答えを［　　］の中に書きましょう。

（1）48)67.2　　（2）1.32+6.8　　（3）10+2×(3+6)　　（4）$1\frac{1}{5}-\frac{4}{5}$

1.4
48)67.2
48
19 2
19 2
0

1.4

1.32
+6.80
8.12

8.12

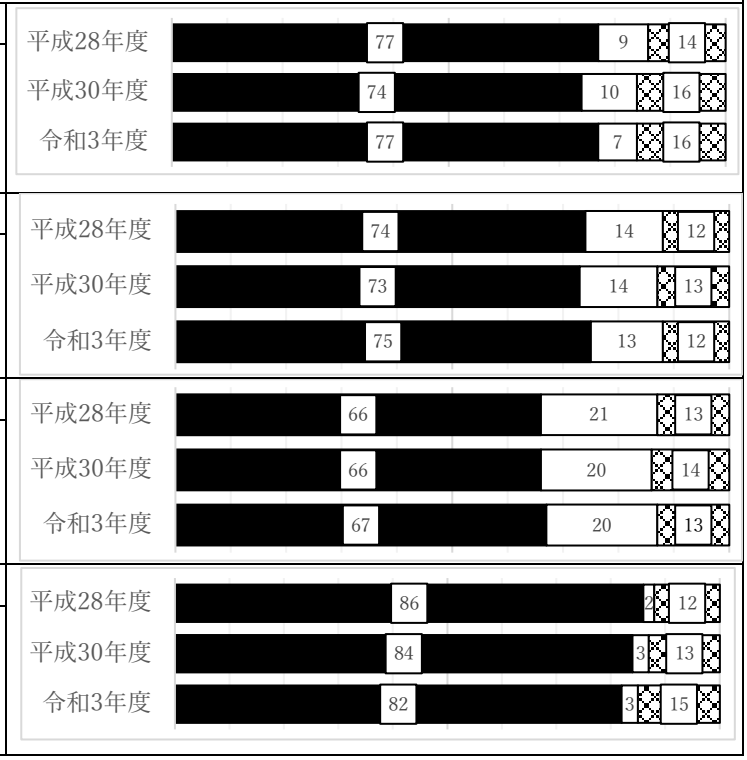
=10+2×9
=10+18
=28

28

$=\frac{6}{5}+\frac{4}{5}=\frac{2}{5}$

$\frac{2}{5}$

問題		評価基準及び割合（%）　※割合は，アルファベット順とする。		
		A	C１	C２
1	(1)	正答	14	左記以外の誤答・無答
	(2)	正答	2 または 20	左記以外の誤答・無答
	(3)	正答	108	左記以外の誤答・無答
	(4)	正答	$\frac{3}{5}$　$(1\frac{3}{5})$	左記以外の誤答・無答



1　（1）は小数÷整数の計算であり，（2）は位を揃えて計算する小数＋小数の問題である。（1），（2）のどちらも誤答・無答が 20%を超えている現状から，計算の最後に小数点をどこに付けるべきなのかを考えさせることや,位を揃えて計算することを繰り返し指導していくことが必要である。また，（2）でいえば「1.32 と 6.8 を合わせた数が８よりも少し大きな数になるはずであり，２や 20 といった数にはならない」と気付かせるためには，日頃から計算前に答えの見当を付ける習慣を身に付けさせ，数量の感覚をもたせていくことが大切である。（3）は（　）の付いた四則計算ができることをねらいとしている。108 と誤答する児童が 20%おり，高い数値を示している。誤答の要因は，（　）内の加法計算をした後に，左から順番に加法計算→乗法計算を行ってしまうためだと考えられる。（　）→乗除→加減という計算の順序を徹底的に意識付けていきたい。そのためには，類似問題に取り組むだけでなく，他の単元（例えば，複合図形の面積を求める学習など）でも，教師が意識的に二つの式を一つの式に表すようにさせたり，計算の途中式を日頃から書かせたりして，定着を図ることを大切にしたい。（4）は繰り下がりのある帯分数－真分数の計算である。授業の中では帯分数を全て仮分数にして仮分数－真分数で計算する方法だけでなく，帯分数の整数部分を１繰り下げて帯分数－真分数で計算する方法も扱い，問題に合わせたり，自分のやりやすい方法を見付けたりする経験を積ませていきたい。

2 ［　　］の中にあてはまる数を書きましょう。

（１）0.36 は 0.01 が［36］こ集まった数です。　（２）4.3 は 0.01 が［430］こ集まった数です。　（３）１億は１万が［10000］こ集まった数です。

3 次の問題に答えましょう。

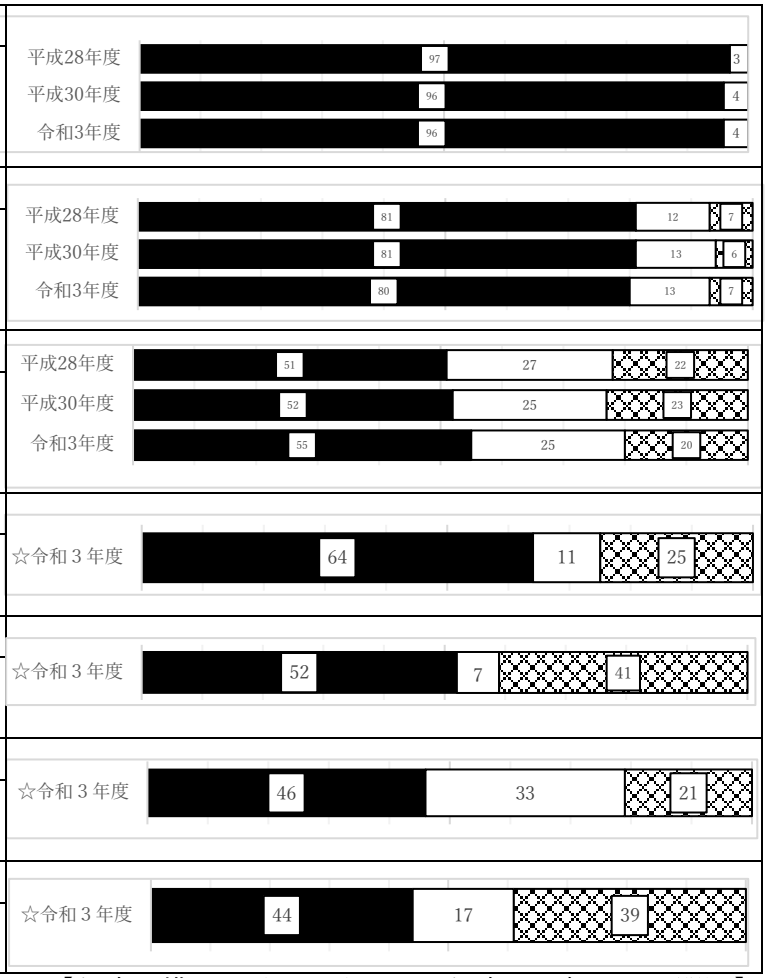
（１）白いテープの長さは 20 ㎝です。赤いテープの長さは 50 ㎝です。白いテープを１とみたとき，赤いテープはいくつにあたりますか。

式［50÷20］　答え［2.5］

（２）みどりのテープの長さは 50 ㎝です。青のテープの長さは 40 ㎝です。青のテープはみどりのテープの何倍ですか。

式［40÷50］　答え［0.8 倍］

2	(1)	A		C	
		正答		左記以外の誤答・無答	
	(2)	A	C１	C２	
		正答	４３	左記以外の誤答・無答	
	(3)	A	C１	C２	
		正答	1000（1 千）	左記以外の誤答・無答	
3	(1) 式	A	C１	C２	
		正答	20÷50	左記以外の誤答・無答	
	(1) 答え	A	C１	C２	
		正答	0.4	左記以外の誤答・無答	
	(2) 式	A	C１	C２	
		正答	50÷40	左記以外の誤答・無答	
	(2) 答え	A	C１	C２	
		正答	1.25 倍	左記以外の誤答・無答	



【年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題】

2 整数や小数をある数のいくつ分とみることができるかをみる問題である。（１）（２）の小数の問題では，正答率が 96%，79%であるのに対し，（３）の大きな数の整数の問題では正答率が 55%となっている。全体の約半数の児童しか正答できていないことが分かる。小数では，小数点の位置をそろえて比べることで相対的な数の大きさが捉えやすく，また 0.1 や 0.01 を単位とみて考えやすい。一方で，整数は位をそろえて書いても，その数が基にする数の何個分なのかを把握しにくいことが誤答の原因と考えられる。10 倍になると位が一けた上がるという基本をおさえ，100 倍，1000 倍，１万（10000）倍，・・・と考えさせ，１万（10000）倍になると単位の名称が変わることに気付かせることが重要である。授業では，位取り記数表を用いて，〇倍すると位がどのように変化するかの関係を捉えさせる活動を繰り返し行っていくことが大切である。

3 小数倍の場面について，数量の関係を捉えて演算決定し，いくつ分にあたるか，何倍かを求めることができるかをみる問題である。（１）は式の正答率が 64%，（２）は式の正答率が 46%，除数と被除数を反対にしている児童が（１）は 11%，（２）は 33%であった。そのことから，除法の立式の際に，大きい数÷小さい数としてしまい，数量の関係が捉えられていない児童が多いと考えられる。授業においては，まず「ある数を１とみる」という言葉の意味を確実に理解させたい。その際には，言葉の説明だけでなく，テープ図や数直線を活用することが大切である。ある数を１とみたときに，もう一方の数が，そのいくつ分にあたるかを求めていることを視覚的に捉えさせたり，図などを用いて立式の根拠を説明させる活動を設定したりすることで，倍概念の意味理解が深まると考える。

4 次の数をみて，
大きい方を選びましょう。

(1) $2\frac{3}{5}$　$\frac{9}{5}$　$\boxed{2\frac{3}{5}}$

(2) $\frac{1}{5}$　$\frac{1}{7}$　$\boxed{\frac{1}{5}}$

(3) $\frac{3}{10}$　0.4　$\boxed{0.4}$

5 たかしさんは下の４つの問題をつくりました。次の（１）（２）に答えましょう。

あ　あめが 96 こあります。１人に 12 こずつくばると何人に分けられますか。

い　96 ㎝のテープを 12 本使います。テープは何㎝必要ですか。

う　子どもが 12 人います。工作でビーズを１人 96 こずつ使います。ビーズはぜんぶで何こ必要です

え　子どもが 12 人います。みんなで 96 このどんぐりを拾いました。同じ数ずつ分けると，１人何こもらえますか。

（１）96×12 の式になる問題はどれですか。ぜんぶ選んで記号を書きましょう。　い　う

（２）96÷12 の式になる問題はどれですか。ぜんぶ選んで記号を書きましょう。　あ　え

4	(1)	A	C１	C２		☆令和３年度 83 / 7 / 10
		正答	$\frac{9}{5}$	左記以外の誤答・無答		
	(2)	A	C１	C２		☆令和３年度 69 / 20 / 11
		正答	$\frac{1}{7}$	左記以外の誤答・無答		
	(3)	A	C１	C２		☆令和３年度 75 / 14 / 11
		正答	$\frac{3}{10}$	左記以外の誤答・無答		
5	(1)	A	B１	B２	C	平成28年度 78 / 6 / 5 / 11 平成30年度 77 / 6 / 5 / 12 令和3年度 76 / 6 / 5 / 13
		完答	い のみ	う のみ	左記以外の誤答・無答	
	(2)	A	B１	B２	C	平成28年度 80 / 4 / 4 / 12 平成30年度 81 / 4 / 3 / 12 令和3年度 77 / 5 / 4 / 14
		完答	あ のみ	え のみ	左記以外の誤答・無答	

【年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題】

4　帯分数と仮分数，同分子の分数，分数と小数との大小関係を比較することができるかをみる問題である。（１）の正答率は 83％で，（２）（３）よりも高かった。帯分数と仮分数の違いはあっても同分母の分数であったことから，帯分数か仮分数のどちらかにそろえることさえできれば，大小関係は判断できたのではないかと考えられる。しかし，（２）の同分子の分数の比較では「分母が大きい方が数が大きい」と捉えたと思われる児童が 20％いた。同分母であれば大小が判断できても，同分子では大小比較ができない児童もいることが読み取れる。数直線を用いて分子が同じ分数の大きさを視覚的に比較させる学習活動を行うことによって，分子が同じ場合は分母が大きいほど小さい分数になるということを捉えさせたい。また，「もとの大きさを５等分した１つ分だから 1/5」などの分数の意味に，意図的に立ち返らせることも大切にしたい。（３）についても，分数と小数の大小比較を行う上では，0.1 と 1/10 は大きさが等しく，どちらも１を 10 等分した１つ分であることを，数直線を用いて理解させることが必要である。

5　乗法が用いられる場面か，除法が用いられる場面かを判断する問題である。誤答・無答の児童は問題から数量の関係を読み取れず，乗法と除法の判断ができていないと考えられる。

この問題を解決するためには，未知の数量を□とし，被乗数と乗数，被除数と除数の関係を図や数直線を用いて表し，適切に立式できるようにすることが必要である。そのためには，低学年から問題場面をアレイ図やテープ図などを用いて説明する経験を積ませ，根拠をもって立式できるようにしていく。文章を読み取り，問題場面を正しくイメージする力を伸ばすには，「①問題場面をテープ図，数直線などに表す　②テープ図や数直線などを基に立式する　③なぜその式になったのかを説明する」といった指導を大切にする必要がある。

テープ図は数直線につながるので，中学年で的確に用いることができるように指導することが大切である。また，数直線は高学年での小数や分数の乗除で用いられることを念頭に置き，児童がテープ図や数直線の有用性に気付けるよう指導したい。

6　次のことを調べるときに，折れ線グラフで表すと分かりやすいものを２つ選んで記号を書きましょう。

㋐　クラスで人気のある給食メニューとその人数

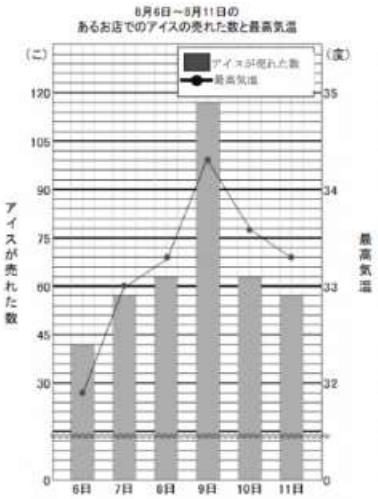
㋑　ある日の朝９時のいろいろな地方の気温

㋒　５日ごとに調べた，ひまわりのくきの長さ

㋓　東京都の１年間の月ごとの気温

㋒　㋓

7　右のグラフを見て，答えましょう。
グラフを見て言えるのはどんなことですか。
当てはまるものを２つ選んで記号を書きましょう。



㋐　気温とアイスが売れる数に関係がない。

㋑　気温が高いほど，アイスが売れた数は多くなっている。

㋒　８月６日の最高気温は 34 度である。

㋓　８月７日の最高気温は 33 度である。

㋔　アイスが売れた数は８月６日から３日連続で 60 こをこえている。

㋑　㋓

6	A	C１	C２	☆令和３年度 44 29 27
	完答	㋑を含む誤答	左記以外の誤答・無答	
7	A	C１	C２	☆令和３年度 54 16 30
	完答	㋒を含む誤答	左記以外の誤答・無答	

【年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題】

6　折れ線グラフで表すとよいものを適切に判断できるかをみる問題である。正答率が 44%であることから，半数以上が適切に判断できていないことが分かる。多くの教科書会社では，単元を通して気温に関係する教材で折れ線グラフの学習を構成している。㋑を含む誤答が 29%だったことから，気温が関係するものは折れ線グラフで表すと捉えている児童が一定数いると考えられる。折れ線グラフで表すとよいものを適切に判断するためには，次の２点を意識して指導したい。

①棒グラフと折れ線グラフの違いを見付けさせる。
- 数や量の大小比較をしたいときは棒グラフ，変化の様子をみたいときは折れ線グラフが適している。
- 棒グラフは順番を並び替えることができるが，折れ線グラフでは，横軸は時間などの連続した量を表しているため，並び替えることができない。

②目的に合ったグラフを選ぶ経験を積ませる。
- 単元の終わりに，目的に合ったグラフを選ぶ問題に取り組ませる。
- 理科や調べ学習等で集めたデータを整理する際にグラフを選択させ，日常的に活用させていく。

２つのグラフの違いを，実感を伴って理解できるようにさせたい。

7　棒グラフと折れ線グラフの複合グラフを読み取ることができるかをみる問題である。誤答・無答が 46%であることから，複合グラフの読み取りが十分でない児童が約半数いることが分かる。複合グラフを読み取るには，まず２つのグラフが何を表しているのか，縦軸と横軸がそれぞれ何を表しているのかを捉えなければならない。本問題でいえば，最高気温を表した折れ線グラフを読み取るには右側の縦軸を，アイスが売れた数を表した棒グラフを読み取るには左側の縦軸を見なければならない。さらに，１目盛りがいくつを表しているのか縦軸それぞれで捉える必要もある。しかし，㋒を含む誤答が 16%であったことから，最高気温を表しているのは折れ線グラフであることが捉えられなかったり，１目盛りがいくつを表しているのかを読み取ることができなかったりしたのではないかと考えられる。指導の際には，縦軸と横軸の項目が何を表しているのか，１目盛りがいくつなのか，一つずつ順を追って読み取っていく経験を大切にしたい。その上でグラフを組み合わせると２つの量の関係を読み取ることができるという複合グラフのよさに気付かせることも重要である。

令和３年度　実態調査　第５学年の結果と考察　　調査人数 40,517人

1　次の計算をして，答えを□の中に書きましょう。

（1）０．６×３．８＝**２．２８**　（2）２．３４÷３．９＝**０．６**　（3）$\frac{1}{8}+\frac{5}{6}=\frac{23}{24}$　（4）$\frac{5}{7}-\frac{2}{5}=\frac{11}{35}$

2　次の問題を読んで，答えを求める式を書きましょう。

（1）２．８Ｌで，かべを３．５㎡ぬることができるペンキがあります。
１㎡のかべをぬるのにこのペンキが何Ｌ必要ですか。

式　**2.8÷3.5**

（2）１ｍの重さが１．３ｋｇの鉄の棒があります。
この鉄の棒０．８ｍの重さは何ｋｇですか。

式　**1.3÷0.**

3　０．４５÷１．５の答えと同じになる式を全部選んで記号を書きましょう。

㋐　４．５÷１５　㋑　４５÷１５　㋒　４５０÷１５
㋓　０．９÷３　㋔　９÷３

㋐，㋓

問題		評価基準及び割合（%）　※割合は，アルファベット順とする。									
1	(1)	A	C1	C2		平成28年度	80	8	12		
		正答	22.8	左記以外の誤答・無答		平成30年度	77	9	14		
						令和３年度	78	10	12		
	(2)	A	C1	C2		平成28年度	79	10	11		
		正答	0.5	左記以外の誤答・無答		平成30年度	77	10	13		
						令和３年度	78	7	15		
	(3)	A	C			平成28年度	81	19			
		正答	左記以外の誤答・無答			平成30年度	78	22			
						令和３年度	78	22			
	(4)	A	C			平成28年度	77	23			
		正答	左記以外の誤答・無答			平成30年度	72	28			
						令和３年度	75	25			
2	(1)	A	C1	C2	C3	平成28年度	57	26	7	10	
		正答 答えの正誤は問わない	3.5÷2.8	2.8×3.5 3.5×2.8	左記以外の誤答・無答	平成30年度	54	26	8	12	
						令和３年度	57	26	7	10	
	(2)	A	C1	C2		平成28年度	67	18	15		
		正答 答えの正誤は問わない	1.3÷0.8 0.8÷1.3	左記以外の誤答・無答		平成30年度	62	20	18		
						令和３年度	62	20	18		
3		A	B1	B2	C	平成28年度	69	4	3	24	
		完答	㋐のみ	㋓のみ	左記以外の誤答・無答	平成30年度	68	4	3	25	
						令和３年度	67	5	4	24	

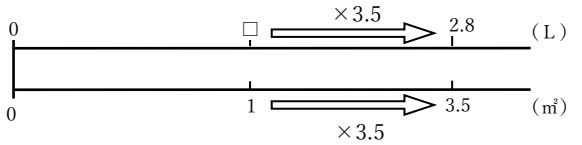
【年度の横の記号は，※：この年度より問題の一部を変更して実施している問題】

1　小数×小数，小数÷小数，異分母分数の加法・減法の計算ができるかをみる問題である。平成３０年度の正答率と比較すると，（１）と（２）（被除数が整数から小数へと変わっているが）は１ポイント上昇，（３）は変わらず，（４）は３ポイント上昇という結果になった。小数の乗法・除法の計算では，乗法・除法の性質や0.1や0.01を単位として考え小数を整数に直すことで，既習の乗法・除法と同じ仕組みでできていることを理解させたい。また，0.6×3.8を0.6×４と見積もり，計算後に答えが大きく違っていないかと確かめる習慣が身に付くよう指導することも大切である。異分母分数の加法・減法では，分母をそろえることの意味や最小公倍数で通分できることを理解させる必要がある。

2　小数の除法・乗法が用いられる場面について正しく立式できるかをみる問題である。平成28年度・平成30年度の実施問題では，正答は今まで通り「式のみ正答」で可としたが，答えを記述する欄を設け，「答えの妥当性を確かめる指導の有効性」を検証した。しかし，その有効性を結論付けるようなデータは得られず，今回の令和３年度実施問題では，平成26年度以前の問題と同じ形式にして調査した。（１）の正答率は平成26年度から令和３年度実施まで53%⇒57%⇒54%⇒55%，（２）の正答率は平成26年度から62%⇒67%⇒62%⇒62%と推移していて，答えまで求めさせて

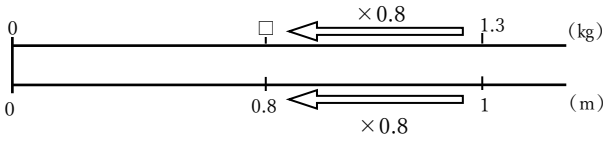
も，立式だけ求めさせてもほぼ同様の結果となることは分かった。いずれにせよ，２問とも低い数値であることは変わらず，数量の関係についての理解が不十分であることが正しく立式できない原因と考えられる。数量の関係を正しく捉えるために，文章題を数直線等に表し，求めたい数量を導き出せるようにしたい。数直線や表の表し方が定着していない場合には，単元の初めなどに指導する必要がある。また，簡単な数値に置き換えて考えさせることも有効である。

（１）の数直線



□×3.5＝2.8　　□＝2.8÷3.5

（２）の数直線



1.3×0.8＝□　□＝1.３×0.8

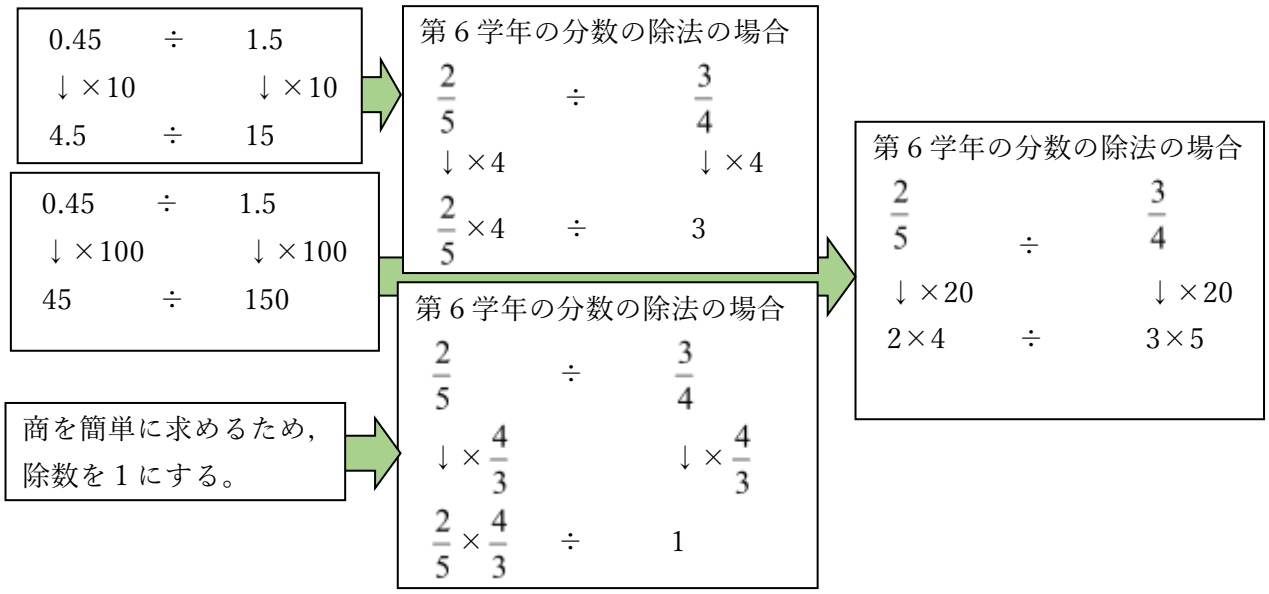
3　被除数と除数に同じ数をかけても（同じ数でわっても）商は変わらないという除法の性質を活用し，問題を解決できるかをみる問題である。正答率は67％で，前回から１ポイント下がる結果となった。

除法の性質を確実に理解させるための手だてとして，その性質が活用できるよさを実感させる必要がある。そのため，第４学年の整数の除法において，200÷25の被除数と除数を５でわると40÷５になることや，200÷25の被除数と除数に４をかけると800÷100となり，さらに被除数と除数を100でわると８÷１になることなどを取り上げる。第５学年の小数の除法において，0.45÷1.5の被除数と除数に10をかけると4.5÷15というように既習の小数÷整数の計算に帰着できる。そして，0.45÷1.5の被除数と除数に100をかけると45÷150というように既習の整数÷整数でわり進む計算に帰着できる

と考えられるようにする。0.45÷1.5の被除数と除数に２をかけると0.9÷３というように除数が整数かつ１桁になり商を簡単に求めることもできる。このように除法の性質を活用して，既習の計算に帰着できることや商を簡単に求められること，除数を１にするよさを多く経験させたい。

除法の性質を理解させることで，第６学年の分数の除法においても，児童が除法の性質を有効に活用して分数の除法の計算方法を自らつくり出すこともできる。

例）



4　なおこさんのクラスでは，家から学校までの歩数を調べています。下の問題に答えましょう。

（１）下の表はなおこさんの家から学校までの歩数を４日間調べた結果です。１日の歩数の平均を求めましょう。

曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日
歩数	３２６歩	３４０歩	３２０歩	３１４歩

答え　平均　**３２５**　歩

（２）同じクラスのひろしくんは，家から学校までの歩数を数日間調べたところ，１日の歩数の平均が７００歩でした。９月に２０日間学校へ通うとすると，家から学校までの歩数は，全部で何歩になると考えられますか。

答え　**１４０００**　歩

5　ある駅で，電車は１５分ごと，バスは９分ごとに出発します。９時ちょうどに，電車とバスが同時に出発しました。次に同時に出発するのは何時何分ですか。

９　時　**４５**　分

6 □の中に入る数や式を選んで記号で答えましょう。

（1）$\frac{2}{5}$＝□　㋐ ２．５　㋑ ０．４　㋒ ０．２　㋓ ５．２

（2）$\frac{3}{4}$＝□　㋔ $\frac{2}{3}$　㋕ $\frac{4}{5}$　㋖ $\frac{6}{8}$　㋗ $\frac{4}{3}$

（3）$\frac{3}{5}$＝□　㋘ ３÷５　㋙ ３×５　㋚ ３÷10　㋛ ５÷３

（1） ㋑	（2） ㋖	（3） ㋘

問題		評価基準及び割合（%）　※割合は，アルファベット順とする。				
4	(1)	A		C		☆令和３年度
		正答		左記以外の誤答・無答		71 / 29
	(2)	A		C		☆令和３年度
		正答		左記以外の誤答・無答		76 / 2
5		A	C1	C2	C3	☆令和３年度
		正答	10 時 30 分	11 時 15 分	左記以外の誤答・無答	73 / 1 / 23 / 3
6	(1)	A		C		☆令和３年度
		正答		左記以外の誤答・無答		63 / 37
	(2)	A		C		☆令和３年度
		正答		左記以外の誤答・無答		72 / 28
	(3)	A		C		☆令和３年度
		正答		左記以外の誤答・無答		79 / 21

【年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題】

4 平均を正しく求めることができるか，また平均を用いて全体量を求めることができるかどうかをみる問題である。測定した結果を平均する方法については，多いところから少ないところへ移動してならすという方法や，全てを合わせてから等分するという方法が考えられるが，それらの方法と平均の意味を関連付けて理解できるようにする必要がある。そこで，具体物の操作や棒グラフ等の操作を通して，ならすということを具体的にイメージできるようにしたい。また，「平均＝合計÷個数」の式も，液量などで集めたものを等分する操作を通して，式の意味を確実に理解させることが大切である。さらに，（１）の問題では，（326＋340＋320＋314）÷４＝325 の計算において，たし算やわり算での計算ミスが考えられる。そこで，（12＋26＋６＋０）÷４＋314＝325 や（26＋40＋20＋14）÷４＋300＝325 などの仮平均で計算する方法の指導も大切にしたい。（２）の問題では，全体量をある程度予測する際には「このまま続くと考えると～」などの，比例を仮定する考えを取り上げたい。そして，式や表，数直線等を用いて全体量を求める方法を説明できるように指導することが大切である。

5 最小公倍数を用いて，問題を解決できるかをみる問題である。正答率 73%で，その他の誤答や無答が 23%を占める結果となった。日常の事象を数理的に捉え，問題を解決する力を育成する必要があるといえる。指導に当たって，普段の授業から，児童が日常の事象を算数の内容と関連付け，学習した内容を用いて問題を解決する経験を重ねることが大切である。「電車は 15 分ごと，バスは９分ごとに出発」することから，15 の倍数と９の倍数を用いて電車とバスの出発時刻を求められるように指導したい。そして，「電車とバスが同時に出発」することから，15 と９の公倍数を用いることに気付けるように，さらに，「次に同時に出発」することから，15 と９の最小公倍数を用いることに気付けるように，児童の倍数に関する理解を深めていきたい。

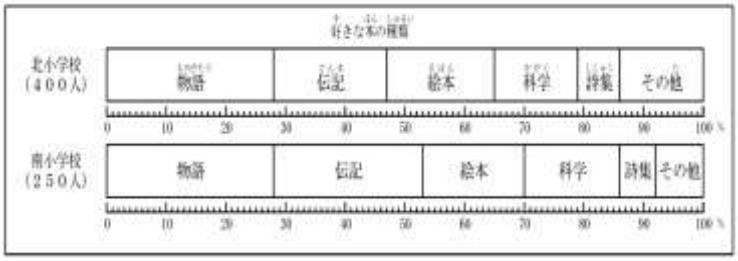
15 の倍数：15，30，45，60，75，90，105，120，135，…

９の倍数：９，18，27，36，45，54，63，72，81，90，99，108，117，126，135，…

→ ９時 45 分

6　分数や小数，除法の式で表された数の中から同じ大きさの数を見付けることができるかをみる問題である。（２）は同値分数を求める問題である。同じ数であっても分母のとる値によって表し方は無数にあることを数直線や具体的な量を用いるなどして実感を伴った理解を促したい。（３）は，分数をわり算の商とみる問題である。形式的に「$\frac{a}{b}$ ＝a÷ｂ」と理解するだけでなく，数直線などを用い，わり算の意味と対応させながら商分数について理解させていくことが重要である。（１)は，分数を小数に直す問題であるが正答率が一番低かった。基本的には，$\frac{a}{b}$ という分数は a÷ｂの商であることから商を小数で求めることで正答を導くことができる。また，「$\frac{2}{5}=\frac{4}{10}$ 」で「$\frac{1}{10}$ ＝ 0．1」の関係から答えを導くことができる。このように多様な解決方法があることを考えれば，正答率は（２），（３）よりも高くてよいと考えられる。日頃の学習から，１つの方法だけを扱うのでなく，いくつかの方法を取り上げながら核となる見方や考え方に迫る授業づくりを心掛けたい。

7　下の帯グラフは，北小学校と南小学校に好きな本の種類のアンケートをとった結果を表したものです。以下の（１）から（４）について，グラフを見て正しいと思われるものには○を，まちがっていると思われるものには×を書きましょう。



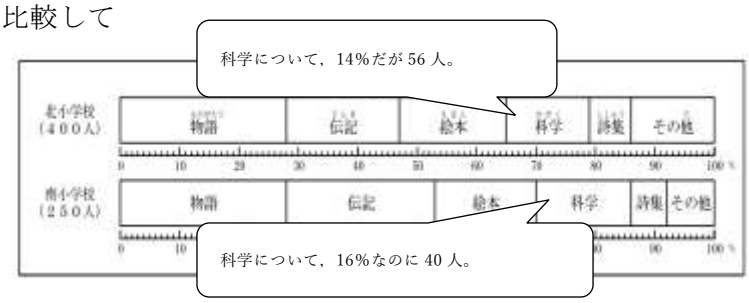
（１）物語が好きな人の数は，どちらの学校も一番多い。
（２）物語が好きな人の数は，どちらの学校も，詩集が好きな人の数の２倍より多い。
（３）物語が好きな人の数は，北小学校と南小学校で同じだ。
（４）科学の本が好きな人の割合は，北小学校の方が大きい。

（１）○　（２）○　（３）×　（４）×

問題		評価基準及び割合（%）　※割合は，アルファベット順とする。		
7	(1)	A	C	☆令和３年度 92 / 8
		正答	左記以外の誤答・無答	
	(2)	A	C	☆令和３年度 69 / 31
		正答	左記以外の誤答・無答	
	(3)	A	C	☆令和３年度 53 / 47
		正答	左記以外の誤答・無答	
	(4)	A	C	☆令和３年度 80 / 20
		正答	左記以外の誤答・無答	

【年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題】

7　帯グラフから割合や絶対数などの情報を読み取らせる問題である。(1)の正答率が 92%，(4) の正答率が 80%であることから，それぞれの帯グラフから割合や絶対数を捉えることは概ねできているといえる。一方で (3)の正答率が 53%であることから，それぞれの帯グラフから読み取った絶対数を比較することについて課題が見られる。誤答の原因は，２つの学校の帯グラフにおいて物語の割合がどちらも 28%と等しく，帯グラフの長さ（＝割合）で比較してしまっているところにあると思われる。　全体数の異なる帯グラフを比較して読み取らせる活動において，割合が同じでも絶対数で比較すると差が出る場面を取り上げることで，全体や部分の数に着目する大切さを実感できるように指導することが大切である。



令和３年度　実態調査　第６学年の結果と考察　　調査人数　39,962 人

1 次の計算をし、答えはもっとも簡単な分数にして、□の中に書きましょう。

(1) $\frac{5}{6} \times \frac{3}{7} =$ $\frac{5}{14}$　　(2) $\frac{3}{8} \div \frac{4}{9} =$ $\frac{27}{32}$

2 次の問題を読んで、答えを求める式を、分数を使って書きましょう。

（1）$\frac{3}{4}$mの鉄のぼうの重さは４kgでした。この鉄のぼう１mの重さは何kgですか。

式　$4 \div \frac{3}{4}$

（2）１mの重さが４kgの鉄のぼうがあります。この鉄のぼう$\frac{3}{4}$mの重さは何kgですか。

式　$4 \times \frac{3}{4}$

問題		評価基準及び割合（%）　※割合は，アルファベット順とする。			
1	(1)	A	B	C	
		正答	$\frac{15}{42}$	左記以外の誤答・無答	
	(2)	A	C1	C2	
		正答	$\frac{1}{6}$	左記以外の誤答・無答	

問題		A	C1	C2	C3	
2	(1)	正答	$\frac{3}{4} \div 4$	$\frac{3}{4} \times 4$, $4 \times \frac{3}{4}$	左記以外の誤答・無答	
	(2)	正答	$\frac{3}{4} \times 4$	$\frac{3}{4} \div 4$, $4 \div \frac{3}{4}$	左記以外の誤答・無答	

【年度の横の記号は，※：この年度より問題の一部を変更して実施している問題】

1　異分母分数の乗法・除法の計算ができるかをみる問題である。乗法の正答率は 90%と概ね理解されていると捉えられる。除法の正答率は 81%と前回とほぼ変わらない。除法の仕方で，逆数にして計算せず，そのまま乗法で計算していると思われる答えは７%だった。計算の指導にあたっては，手順を習熟させるだけではなく，数直線や面積図等の図を活用し，計算の構造を児童がしっかりと捉えられるようにしていきたい。面積図を活用することによって数学的に考える資質・能力も育てていきたい。

2　分数の乗法・除法の用いられる場面について正しく立式することができるかをみる問題である。除法についての完答は，47%（前回 43%，28 年度 46%）と約半数の児童が完答できていないことが分かる。長い間，正答率が 50%以下と低く，正答率の低い年が続いている。除法の場面であることは理解していても，数量の関係についての理解が不十分である児童が 23%，除法の場面であることを理解していない児童が 13%いることから，数直線や表を用いて立式していない児童が多いことが考えられ，「数直線や図を活用し立式する」ことに重点を置き，指導していくことが必要である。その際に，２つの数量が比例関係であることを確かめ，立式することも指導しておきたい。

一方，乗法の場面について正しく立式することができる児童は，68%と除法より 20 ポイント高い。児童は１あたりが分かっていると，問題の理解がしやすく，立式できると考える。分数や分数倍で割ることの意味は，児童にとって理解しづらいものである。数直線から立式できたら，問題は，「単位量×割合＝全体量」のうちの何かにあたる数を求めているのかを数直線を基に式の意味を考えさせる指導も重要である。数直線をかくことにより，答えの数量の大きさが見積もれることも児童に実感させたい。特に，分数の除法の計算の仕方では，除数を逆数にしてかけ算をするという計算の構造を，数直線や面積図を活用しながら，計算の過程を十分に理解できるよう，既習事項である小数のわり算や分数のわり算を想起させながら，指導していく必要がある。

3

$\frac{4}{5}$dL のペンキで、板を$\frac{3}{7}$㎡ぬれます。このペンキ1dLでぬれる面積を求める式は、

$\frac{3}{7}\div\frac{4}{5}$　です。

下の【式】と【考え】は、$\frac{3}{7}\div\frac{4}{5}$の計算が $\frac{3}{7}\times\frac{5}{4}$ でできることを、どれも正しく説明しています。3つの【式】ア～ウの中から、はじめに式を1つ選び、その式にあった【考え】は、①～③のうちどれにあてはまるかを考え、その記号と番号を1つずつ答えましょう。

式ア－考え②　式イ－考え③　式ウ－考え①

【式】

ア　$\frac{3}{7}\div\frac{4}{5}=(\frac{3}{7}\times5)\div(\frac{4}{5}\times5)$

$=\frac{3}{7}\times5\div4$

$=\frac{3\times5}{7\times4}$

イ　$\frac{3}{7}\div\frac{4}{5}=(\frac{3}{7}\times\frac{5}{4})\div(\frac{4}{5}\times\frac{5}{4})$

$=\frac{3\times5}{7\times4}$

ウ　$\frac{3}{7}\div\frac{4}{5}=\frac{3}{7}\div4\times5$

$=\frac{3\times5}{7\times4}$

【考え】

①問題の場面をもとに考えました。1dL でぬれる面積は $\frac{1}{5}$dL でぬれる板の面積の5倍です。だから、4等分して5倍しました。

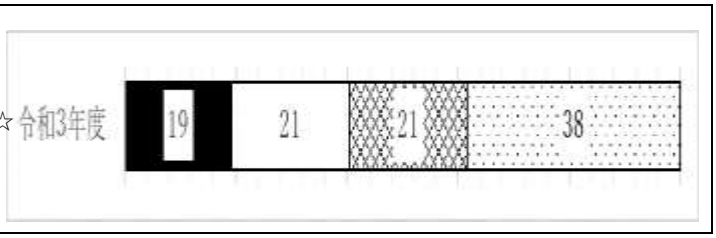
②わり算の性質を使いました。わる数の分母と同じ数を、わられる数とわる数にかけました。

③わり算の性質を使いました。わる数の逆数を、わられる数とわる数にかけました。

【式】

【考え】

3	A1	A2	A3	C
	式ア－考え②	式イ－考え③	式ウ－考え①	左記以外の誤答・無答



【 年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題 】

3　分数の除法はわる数の逆数をかければよいことの根拠を説明することができるかをみる問題である。1の（2）は，正答率81%なのに対して，この問題は正答率61%と20ポイントも低くなっている。この問題での解答を見てみると，形式的な数の操作はよくできているが，その操作の意味や意図まで理解できていない児童が多いことが分かる。問題を読み，式を立て，答えを導き出すことはできているが，計算の仕方の意味は理解できていない児童が多い。また，その意図を言葉や文章で説明されたものと，計算の両方とが結びついていない。面積図や除法の性質を使った求め方を理解させ，どれかの方法で答えを求めることができるよう指導したい。授業内で，立式の根拠や計算の方法などの説明を丁寧に行い，確実に意味理解ができるように指導していく必要がある。

4　次の文章にあてはまる式を、x を使って表しましょう。

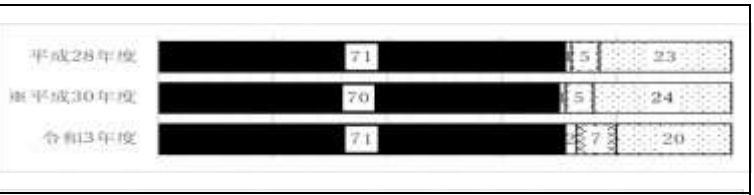
（1）1個80円のチョコレートを x 個買って、500円を出しました。おつりを求める式を書きましょう。

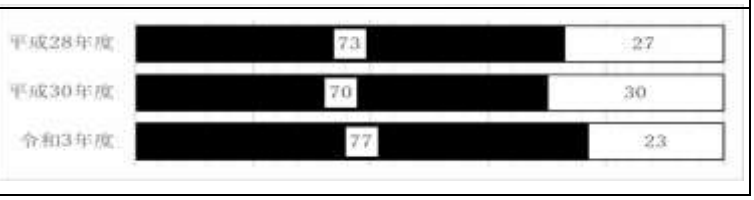
式　**500-80×x　500-(80×x)**

（2）80g の入れ物に、1個20g のボールを x 個入れました。重さを求める式を書きましょう。

式　**80+20×x　20×x+80**

4		A	C1	C2	C3
	(1)	正答	500－x×80 500－(x×80)	80×x－500	左記以外の誤答・無答
	(2)	A		C	
		正答		左記以外の誤答・無答	





【年度の横の記号は，※：この年度より問題の一部を変更して実施している問題】

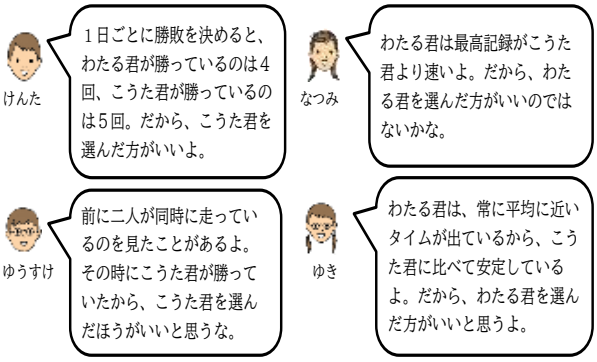
4　文字を使って数量の大きさを表すことができるかをみる問題である。どちらも記号で選択する解答形式と比べると，１～２ポイント程度であるが減少傾向にある。このことから，文字を使って立式することを苦手とする児童が多いことが分かる。また，既習事項（２学年で学習したかけ算の意味）がしっかり理解できているかも問われた問題になっている。児童の中には，□が X のような文字に変わっただけで困難なイメージをもってしまう児童もいる。文字式から文章問題を作らせたり，文字式を活用する場面を多く取り入れたりする指導を丁寧に行うことで，文字式を読むことに慣れさせたい。

5　運動会のリレーについて考えています。次の問題に答えましょう。

（1）はるとさん、かずまさん、ゆうさん、けいさんの４人が、同じチームのリレーの選手に選ばれました。この４人の走る順序は何通りありますか。

24　通り

（2）補欠の選手として、わたるさんを選ぶかこうたさんを選ぶかで迷っています。次の４人の話の中で、<u>１０日分のデータをもとにして正しく話をしている人</u>を、すべて選びましょう。

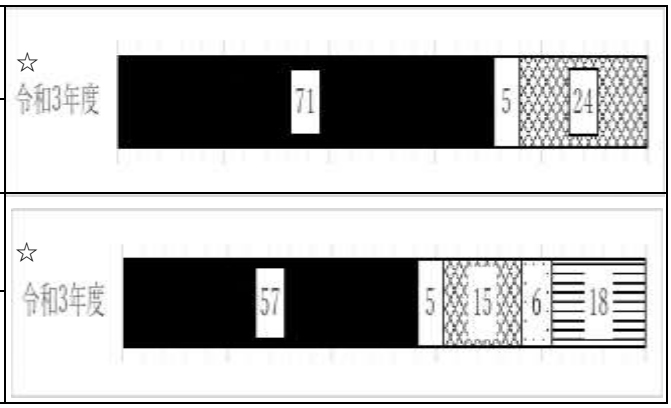


【50m を走った記録】

走った日	4/13	4/14	4/15	4/16	4/17	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	**平均**
わたる（秒）	8.1	8.2	8.6	8.2	8.1	8.2	8.4	8.2	8.3	8.2	**8.25**
こうた（秒）	8.2	7.8	8.3	9.2	8.1	8.0	8.3	7.7	8.5	8.4	**8.25**

けんた　ゆき

5						
	(1)	A	C1	C2		
		正答	6	左記以外の誤答・無答		
	(2)	A	B1	B2	C1	C2
		完答	けんたのみ	ゆきのみ	ゆうけをふくむ	左記以外の誤答・無答



【 年度の横の記号は，☆：この年度より新設した問題 】

5　（１）順列について，落ちや重なりのないように調べることができるかを見る問題である。正答の 24 通りと答えた児童は 71％で，組み合わせと考えた児童は 5％と，正答数が多い。しかし，誤答・無答が 24％と 2 割を超えた数値となっている。平成 30 年度の順列の問題では，０を含めた 4 つの数字から 3 桁の数を作り出すといった順列の応用問題であったため，58％と低い数値であった。今回は 7 割の正答率と，基礎的な順列の理解はできていると考えられる。誤答・無答については，30 年度（28％）今年度（24％）である。問題を把握することや，落ちや重なりがないようにするために，樹形図をかく習慣を付けさせることが必要であると考える。

（２）データをもとに考察することができるかをみる問題である。完答 57％，「けんたのみ」「ゆきのみ」がそれぞれ 5％，15％という結果であった。完答と「ゆきのみ」を合わせた 72％の児童はデータの活用方法として平均を用いることはできている。しかし，けんたの考え方を理解できていない児童がいることも分かる。けんたの考えは「1 日ごと」「その日に勝っている日数で比べる」と条件を決めて選んでいる。問題文には，「10 日分のデータをもとにして，正しく話をしている人」であるから，自分と考え方が違っていても，目的や条件が正しく設定されていれば正しいということを理解しなくてはならない。

データの活用は，平均だけではなく，最大値，最小値，最頻値，中央値など，様々な代表値がある。何を大切にするのか，どんな目的で表すのかを決めること。また，友達の考えを知り，理解する授業をしていくことが大切である。

４　令和４年度学力実態調査問題について

令和４年度は，現行の学習指導要領に基づき「図形」「測定」（下学年）「変化と関係」（上学年）領域についての新問題で調査を行った。各学年の問題のねらいは，次の表のとおりである。

【令和４年度実施の「図形」「測定」（下学年）「変化と関係」（上学年）領域の問題のねらい】

学年	「図形」領域	「測定」「変化と関係」領域
1	・方向や位置についての言葉を用いて，ものの位置を表すことができる。 ・数が順序や集合，位置を表すことを理解できる。 ・目的に合わせて，平面の形を分解して捉えることができる。	・時刻を正確に読むことができる。 ・任意単位を用いて，広さを比べることができる。 ・正しく長さを比べることができる。
2	・辺の長さや核の大きさに着目して，図形を弁別できる。 ・正方形の構成要素を正しく理解して弁別することができる。 ・箱を構成する辺の数を筋道立てて考えることができる。	・ かさや長さの単位の関係が分かる。 ・ものさしの長さを正確に読み取ることができる。 ・長さやかさの良寛が身に付いている。 ・時刻を読むことができ，簡単な場面について時間を求めることができる。
3	・図形の概形を捉え，辺の長さや角の形に着目して弁別することができる。 ・同一円の半径はどこでも等しいことが分かり，この等しい半径を二辺とする二等辺三角形をかくことができる。 ・円の半径が直径の半分であることが分かる。 ・大円と小円の接し方を見てから，小円の半径や直径を求めることができる。	・長さや重さの量感が身に付いている。 ・巻尺の目盛りを正しく読むことができる。 ・はかりの目盛りを正しく読むことができる。 ・箱にぴったり入っている球の半径から，箱のたて，横の長さを求めることができる。 ・任意単位の考えを用いて間接的に重さを比べることができる。
4	・いろいろな角度を見積もることができる。 ・長さの量感をもとに，身近なものの面積を求める式をたてることができる。 ・式をもとに，複合図形の面積の，多様な求め方を読み取ることができる。 ・四角形の置かれている位置にかかわらず，１組また２組の辺が平行な四角形を弁別できる。	・対応する数量を表に整理することができる。 ・伴って変わる２量の関係を見出すことができる。 ・２量の関係について，倍による比べ方について理解している。
5	・底辺や高さに着目して三角形や平行四辺形の面積を求めることができる。 ・体積の多様な求め方を，式から読み取ることができる。 ・合同な三角形をかくための方法を筋道立てて考えることができる。	・時間と道のりから速さを求めることができる。 ・単位量当たりの大きさの考えを使って，問題解決ができる。 ・基準量，比較量，割合の関係を捉え，比較量や基準量を求めることができる。 ・混み具合を求める除法の式と商の意味をとらえ，混み具合を比べることができる。
6	・線対称・点対称な図形の定義とその性質に着目し，正しく弁別することができる。 ・既習の図形に帰着して，円の面積を求める方法を理解している。 ・２倍の拡大図を作図することができる。	・比例の関係を捉えることができる。 ・簡単な比を見付けることができる。 ・比を活用して，必要数を求めることができる。

５　終わりに

実態調査委員長　　熊倉　勝

令和３年度の学力実態調査につきましては，その趣旨を十分にご理解いただき，多数の先生方にご協力をいただきまして，ここに小冊子にまとめることができました。

この調査は,「数と計算」「データの活用」領域に関する過去の調査結果との比較･検討や内容を変更した調査問題による考察を通して，つまずきの分析，指導の手だてを示しています。そして，この調査は各学年の算数科の内容として，より重要と思われるものについて行っています。

今回の実態調査の結果と考察は10月14日,都算研の令和４年度の研究発表会で報告いたしました。当日の資料とともに本冊子を，各区市等算数部の活動をはじめ，各学校におきまして今後の算数指導にご活用いただければ幸いです。今回の調査児童は，38 地区 243,198 人でした。

結果と考察の各地区への配付や都算研ホームページへの掲載・令和４年度研究紀要（令和５年５月発行予定）等を通して,調査結果をさらに活用していただけるよう努力を継続して参ります。今後も，東京都の児童の学力を的確に把握し向上させるために，より活用できる実態調査を目指して見直し，よりよい調査を実施して参りたいと思います。年度末のご多用の中，調査・集計のご協力ありがとうございました。

結びに，今回，調査にご協力くださいました地区を掲げ，感謝の意を表します。

千代田，中央，新宿，文京，台東，品川，目黒，大田，世田谷，渋谷，中野，杉並，北，荒川，豊島，板橋，足立，江戸川，葛飾
八王子，武蔵野，三鷹，府中，昭島，調布，町田，小金井，日野，福生，狛江，東大和，清瀬，東久留米，稲城，あきる野，西東京，西多摩郡，私学　以上　38 地区

研　究　部　長　田中　淳志（あきる野　東秋留小）
実態調査委員長　熊倉　　勝（文京　明化小）　　実態調査副委員長　日下　勝豊（目黒　中根小）
実態調査委員　　◎総世話人　　□学年世話人

1	小山田宝子	（杉　並・新泉和泉小）
	水野　裕介	（調　布・深大寺小）
	大岡　佑太	（三　鷹・第五小）
	網本　幸代	（渋　谷・西原小）
	伊藤　昌子	（目　黒・東根小）
2	中里　孝昭	（世田谷・喜多見小）
	前田　史昭	（板　橋・北前野小）
	矢古宇早紀	（江　東・第四大島小）
	白井亜紀子	（八王子・上川口小）
	菅野　祥夫	（立　川・西砂小）
3	添田　正彦	（杉　並・杉並第一小）
	森田さとみ	（目　黒・宮前小）
	伊藤　嘉則	（文　京・窪町小）
	鵜飼万里代	（文　京・金富小）
4	室伏あゆみ	（　港　・御成門小）
	北條　静香	（練　馬・大泉学園桜小）
	宮田　　花	（荒　川・第三峡田小）
	高田　　歩	（板　橋・志村第六小）
	石浦　　将	（青　梅・若草小）
5	村上　隆之	（立　川・第二小）
	椎野　祐史	（武蔵村山・第八小）
	萩原　良太	（目　黒・上目黒小）
	池田　裕彰	（学芸大学附属小金井小）
	茂木慎太郎	（江　東・浅間竪川小）
	松下　　剛	（武蔵村山・第三小）
6	前川　和宏	（府　中・南白糸台小）
◎	鈴木　裕太	（足　立・中川小）
	秋山千沙子	（目　黒・上目黒小）
	寺嶋ひとみ	（文　京・千駄木小）
	松井　俊彦	（あきる野・草花小）